



麻生路郎主宰



川柳新誌



二月號

清 酒

賀
正

白 鶴 禮 讀

白鶴の瓶たまることたまること
 白鶴へみんな揃ふたいゝ話
 いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
 白鶴を一本つけてからの事
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 當選に白鶴樽のままで来る
 貧乏の中に白鶴だけの味

攝津灘

嘉納合名會社釀



病 閑

▼ラヂオを通じて唐人お吉のあま
い小唄が、きさらぎの夜の空気を
ふるはせてゐる。

私のあたまのどつかに、こうし
たあまさにしみみさせられるも
のが、かすかに残つてゐるのもう
らしい。

▼若い人たちの川柳にはさうした

あまさが、かなり豊潤に流れてゐ
てもよきさうに思はれるが、近ご
ろの世相がさうさせないのか、と
かく智的になり勝ちであるのがさ
びしい。

▼と云つたからとてあまりに月並
な感傷句は讀むに堪えない。それ
よりは大きな穿ちや湧きあがる笑
ひを欲する。

何れにしても、人間の魂に點火する川柳でなければ、十七音字
工作がいかにか巧みにほごこされてあらうごも、それは沙上に描か
れた閑文字に過ぎない。



川柳雜誌第十二卷第二號目次

文苑

病

閑

麻生路郎(一)

誹風松竹梅のつどひ

亂耽記(四)

川柳時評

福田山雨樓(六)

武玉川二篇研究(一〇)

梅本秋の屋
森東魚二
蛭子省(四)

句ご理性

西田艸樂(三)

橋本綠雨氏表彰祝賀の夕

汀柳記(五)

月街の高臺

福田山雨樓
西田艸樂(四)

柳壇畫報(四)

川柳書架(四)



創作

近作柳樽……………麻生路郎選（九）

川柳塔……………麻生路郎選（一〇）

粒々集……………五健、柳秀、久流美（一〇）

日本名所名物川柳……………前田雀郎選（一〇）
宮尾しげを畫（一〇）

東京の巻（一）—二重橋

本社新春句會……………九 波 記（一〇）

一路集……………長崎柳秀選（一〇）
自慢……………姫田夕鐘共選（一〇）
面會……………市場沒食子（一〇）

川柳光耀會……………竹内機見女記（一〇）

各地柳壇……………路郎、紳架、汀柳整理（一〇）

上から……………汀柳（一〇）
編輯の意……………山雨樓（一〇）

字……………重 表紙繪きよし、島平、宰二郎、しげを、路郎合作



(務 總 前) 人 同 局 總 編 社 本
影 近 の 人 夫 子 那 美 三 君 兩 縁 本 橋
— 影 攝 電 國 芸 藝 六 一 〇 二 一 九 —



雨録・るほか・りよ右 ひさつの梅竹松風評
氏譜の柳汀・魚東・樂沖・光正・實胤・那路、二鋒・北南



(右) 氏美流久川安 員客社木
(左) 氏角不野角 人俳町鶴鶴

川柳時評

福田山雨樓

▽「きやり」の柳壇展望で花川洞曰く、「流行作家は枝葉の問題である、東京の雀郎、周魚、三太郎、大阪の水府、路郎の現役五頭目がシツカリ手をつないで呉れ、ば當分吾柳界は萬々歳である。」はどうかと思ふ。

▽手をつなぐと云へば聞こえがい、様であるが、それは無理な注文である。早い話が右の東京五頭目についてもそれ／＼吟社を擁してゐるではないか。

寧ろ川柳の進歩からは各獨立し相闘争する方がいゝのだ。只ひとつ、文壇への押出しを圖ることにおいて、その精神において結合すれば足りる。

▽路郎と水府にしても、この二人に握手を求むるのは認識不足だ。第一性格の相違がこれを許さない。路郎は詩人肌、水府は商賣人肌、到底水と油である。

次に句の傾向が違ふ。水府は甘い句、穿ちの句を嗜くし、路郎は寂しい句、主觀句を好む。▽三太郎は「文壇進出は却つて大阪のやうに、文壇のないところの方がやりよい」と云ふが逆だ。

日本の外交が國際聯盟と云ふ本舞臺へ斬込んだらばこそ、世界が日本を馬鹿にしないのだ。東京にゐる川柳家は、東になつて文壇へ挑むべし。

▽この前番傘の塊人が、雀郎の説を反駁して、川柳家が川柳家の悪口を云ふよりも、川柳のよさを文壇に示せと叫んだことがあるが、それは一面觀であつた。

雀郎は「都新聞」に「俳諧厄拂ひ」を執筆して、俳人に一大刀酬いてゐる。この論歩も必要であるが、併せて現代の川柳についても、名吟を示して迫ることが望ましい。

▽近來「川柳名句」集と稱する出版が簇出する。結構であるが問題でもある。



それは句主或は購讀者への歡心に迎える、算盤玉の關係もあることながら、餘りに名句に乏しく、然らざるものゝ多きことだ。

「川柳の名句とはこんなものだ」と威張れるやうな句集が一つや二つなくてはならぬ。

昔「川柳新星會」から出した「一九二四集」など手本にしていゝ。

▽「手」で町二が「僕の川柳論」をものしてゐる。そして川柳を棄て、自由律たるべし、と叫んでゐる。

これは大分井泉水あたりにかぶれてゐるが——よき意味において——斯くの如くにして、川柳圈内へ後足で砂を蹴ることは淋しい。且つ苦々しい。

夢路の言葉ではないが「川柳を愛し得る素質」が歪んで來たのではないかと思ふ。

▽井泉水の文章は読みよく、著書も多いので、我田引水的理論にはつひ引き付けられるが、これによつて俳句を誤るものは尠くない。

彼が自由律を主張する手段として、月並俳句や宗匠俳句を例にとつたり、現代俳句にわざと觸れないなどは感心出來ない。否つくゞいやになつた。

井泉水の議論が、川柳にも短歌にも通用するかのやうに早合點しては困る。

▽「うきよ川柳」正月號で「大衆性を失つた川柳は、陸に上つた河童」と拔天云ふ。これは「漫書」と川柳とは兄弟分」と云ふ見方に據つたものらしいが、餘り單純に片付けてゐる。

いやそれよりも同誌巻頭に掲げた柳書と句の行き方で以て、大衆性ありと自惚れることを怖れる。大衆を馬鹿にすることはいけぬが、大衆を買被ぶることは更にいけない。

▽概して柳壇が平穩である。霸氣に乏しい。今年あたりからもう少しお互ひに闘ひたいもののお互ひに競ひ争ひ練り合ふことが必要だ。

東西の交歡も結構だが、眞の川柳の友達は何れも心のときより、悲しみ合ひ助け合つたときの方が胸を擗つ。

柳友の遊戯的社交と、吟社の籠城主義——これは川柳を害する。



近作柳樽

路郎選

隣から並べて去んだ仕立賃
 寒い夜のラチオドラマが喧嘩する
 長男の無口に母が草臥れる
 カンニングペーパー小使掃いて行き
 秋更けて胃に鳴る音は悲しかり
 こゝに髻あり月末のものおもひ
 春の苦に妻は箆笥をあける音
 狂人の掌にこゝろなく雪がふり
 ルンペンに思案があつて寒い空
 巡禮を押しつけて時雨通りけり
 お師匠の癖まで知つて一の弟子

殿

高知

大阪

大 門
 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 翠 葉
 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 阿伽陀



或る有閑婦人へ

淫樂に疲れ齒醫者で誕する
 凶作地涙を探す特派記者
 塀高く没交渉に構えたり
 金策へ向ふも堅い膝で居る
 預金して冬の日向を母と行く
 晝の痴話密柑の皮の味氣なき
 小説家五日の旅を書かされる

御四國顛拜の旅

遍路宿部屋一杯に荷をひろげ
 いろり火はとろり身の上話など
 干柿を御茶受けに出す遍路宿
 用捨なく掟は鹹にしてしまひ
 行商の足に食ひ付く紺ばつち
 妾宅の勝手口にもベルを付け
 賀札をこよりにしてたのを見られ
 突然に黒子の事で笑はれる

長野

同 柳 兒

神戸

同 同 九 葉

宇治

一 風

大和

同 同 翠 峯

神戸

同 同 同 吉 左 右



介抱のうまい女給の手をにぎり
 血脈の話重役室の午後三時
 どうせすき焼さ産まぬ鶏
 牛へ君ちとぜいたくと思はんか
 何にも言はない兄の掌の紙幣
 追憶の雲むくく湧いてくる
 十二月錢の音まで變つて來
 十二月眼をつむりても十二月
 金の無い實直さをばほめられる
 豆のある掌で税金をつき出され
 無抵抗主義の裏手の陰險さ
 もの賣りへ吠ゆ犬柳「枯る廣場
 生活の灰の深さへ差す火箸
 ポブラポブラ脳病院へ月がさし

内地行連絡列車

どの顔も内地へ歸るやはらかさ
 鉛筆とがらした窓へ雀が來

大阪

盛ヶ池

愛媛

神戸

釜中

同 愚 堂

同 同 雨

同 同 松

同 同 宵 明

同 同 同

同 同 木 通

同 同 耕 朗

同 同

同 同



救世軍君も顔色良くな
いぞ
大版 牧人

推して知る全豹それが怖かつた
同

空想へ紙の蝶が飛んできた
同

T子ちゃんの死

柩を守る父もなく母もなく
青鬼

病めるSちゃん

懐爐など入れて淋しい腫の少年
同

病床吟

熱が下つたうれしさのバナナ剣く
同

質札のひそむ財布と睨んだり
朝雨

いつそもう古典に生きるお嬢さん
同

愛の巢が八百屋の高いのにきづき
同

のろけ節思ひは遠く飛んでゐる
雛千代

藝者てふ言葉葉淋し髪ほつる
同

抜けそうに首出来上がりたそがるる
同

糸瓜糸瓜俺の拳固を受けて見よ
拵一路

目がもうたのかまい／＼の塚を落ち
同

(註)まいまいとは川にゐるまいまい虫



置薬屋が来ただけの冬一日
 病院の裏より助からず出され
 善人といふおちつきの目が細く
 目刺焼く匂ひ障子が昏くなり
 年末の雨一日の損にする
 竹籤を汽車は同じ速さなり
 これ程の覺悟禁酒を侮られ
 不平書く爲でなかつた日記帳
 商戦術グラビヤ美人貼り歩き
 生きる道牧師の白髪見付けたり
 紹介所まともに金齒みてとられ
 熱の子へただ若き父若い母
 子のいたづらを猫が見てゐる
 夜店の湯呑漢詩が讀めて買ひ
 目論んだ株が當つた薬風呂
 ワンタン屋寒い團扇の音をさせ
 マドロスの妻に親しむカレンダー

神戸

同
 明坊

高知

同
 同
 珍景

大阪

同
 同
 天國

今治

同
 都留逸

神戸

同
 同
 木履

大阪

同
 同
 山海子



潜水夫兜をぬげばもう五十
北風にマスト塗るハケ又落し
訪ねきてみれば廊の灯が近い
春の顔ふつと個性をとり落し

失業ひさし

すこし肩がとがつてるかげつきまとふ
満月へ逢えぬなどは考へず
家捨てゝ見た生駒山晴れて居る
筒抜けの人生觀に氣を合し
利に動く男扇子の構え様
ベルト今師走のリズム立つてゐる
儲かつて労働組合など忘れ
貴公子然と戻れば燈が惨め
麗人が何ぞ計らん髪を剃り
口實がたくみな娘とも知らず
人生は五十年なるコンパクト
ころげゆくたまの妙へなる音すめり

竹原

大阪

同

同

同

尾ヶ崎

巖ヶ池

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
征 二 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
月 天 月 街 美 美 美 美 美 美 美 美
籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠



冬來たりかばねのこみを囓ふなり
チヨコレート食べる女の目がまるし

四國にて

寝てこした瀬戸内海の風もよし

胃潰瘍と診定され

パンと乳粥と卵の日は續き

天王寺動物園あじか池にて

投げ魚あじかキャッチのやうに受け

案の定額のひろい子が生れ

靴の泥「後晴れ」とつふバスを降り

重役の機嫌ゴルフの服もよし

嬉しさの火鉢ともなり故郷の夜

瀬戸火鉢店ひまにして母想ふ

出た日命日沖の海鳴り

昇給へ仔犬の鼻も嬉しくて

黄昏の惱みシネマへ足が向き

文學に希望をつなぐ松葉杖

大阪

同 水 客

同

同 利 生

神戸

同 久米雄

名古屋

同 令 風

大阪

同 葉 光

今治

同 心 府

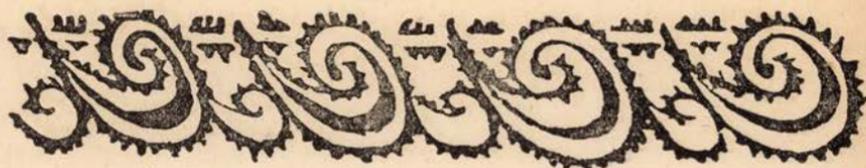
高知

同 青 雨



常識を鼻で笑つてあきらめる
 穴炬燵外は吹雪の芋が焼け
 ストープへ来て靴下の穴を知り
 泣やまぬ子に立つて来る手内職
 貸借が無うてさびしい年の暮
 姿見へやつれた顔をわろてみる
 あばら骨數へてまでも淋しがり
 口叱言親父へ眞面に炭がはね
 轉向を誓ふ腕に日本晴
 内心の空虚を充たす如く飲み
 酒飲めば世の呷ちつゝ寝ぬる父
 兄弟のやうな我が子を羨まれ
 處世術心と別な返事もし
 顔を見るだけが嬉しい戀もあり
 足下の蟻にも生きて行く世界
 バット一本もらつていそがしい話

今 拾	大 阪	愛 媛	神 戸	森 長	豊 ヶ 池	大 阪	名 古 屋								
小 樓	同	寒 草	同	孤 鶴	同	港 兒	同	葉 魚	同	浮 鬼	同	菊 路	同	岩 喜 固 萬	同



祖父の死

ともしびは夢でなかつたすきま風、
就職の朝の一步にはらむ風

霧島温泉にて

湯にしづむ落葉にふれる白い足
あきらめよあきらめよとて時雨する
面白く女の嘘を笑つてた

平穩な田舎の工場山が見ゆ
擴げれば工場時代の表彰状
意地悪に姉の古着を見破られ
反射する心ふたあり切りで生き
先頭に準じて帽子脱ぐ鳥井

大樓氏へ

退職といふ披露状うらやまれ
冬の蠅我が生活に似て淋し
不機嫌な父へ女中は手をつかへ
新妻の日記世間に觸れてゐず

奈良

同 双亭

竹原

同 春帆

大阪

同 いの助

同

同 梅子

今治

同 紫陽

神戸

同 霞川

大阪

同 木圭



ストリープの周りは馴染客許り
 雪やけの顔でうれしい戀があり
 大伽藍落葉を掃かふ術もなく
 前借のハンデキャップへ強ひる無理
 女房もなく三十の誕生日
 俳優に似て縁談が遠いなり
 ロケーション臍までつかる川へ逃げ
 夜店の灯令嬢風も歩くなり
 いさかひし夜のシートに眼がいたむ
 夜の色にまぎれ人焼くにはひする
 神職の妾黒襦子よく似合ひ
 なつかしく亡父遺愛の梅が咲き
 泣けば満つ子供心のなつかしや
 舌戦の果てて淋しきたばこ盆
 うぐひすも鳴かず淋しい梅が散り
 コンニチハ女世帯へ大男
 朝々を幼き聲に起される

大阪	竹原	岡山	大阪	盛ヶ池	京都	神戸	竹原	神戸
雅	同	都	同	汀	同	世	同	同
星	子	雨	間	音	同	六	同	同
					朗	同	丁	同
						同	楚	同
						同	堂	同
						同	蛙	同
						同	庵	天
						同		風



猫抱いた母へ十六ミリ忙し
 言ひ負けた肱枕なり裾寒し
 ふるさとの雪をラヂオできいて寝る
 笑ひみなうつろに冬の療養所
 看護婦等ガラスを拭けば唄となり
 日盛りを爪切る音の療養所
 心みな雲に托してねて暮そ
 御曹子は本で讀んでる處世術
 白粉の固さを溶いた病み上り
 求職も同じ歩調でビルに入り
 嘘を聞く子供の顔の眞剣さ
 親がない私の兩掌見てゐたり
 霜焼の手で初日の出おがむ母
 ふと鼠魚の方へ猫を逃げ
 曇りのち晴とラヂオは雨の中
 お妾のお古の猫飼ふ料理人
 御佛に疑ひ持つ日冷雨する

岐阜

大阪

盛ヶ池

高知

大阪

盛ヶ池

大阪

東京

同 京 糸
 同 敏
 同 由紀美
 同 稻 實
 同 琴 泉
 同 陸奥夫
 同 破 鼓
 同 東 游
 同



何うしても此處まで讀むといふ遊茶
 十二月ノンキャツプでは寒むそうだ
 約東の枕時計に朝の冷え
 麻雀の歸りへ凄いいブルの影
 獨り者は氣樂とおだてあげられる
 縁談は他所事でありからかはれ
 ネクタイを解いて夜食の焼豆腐
 あたふたと出掛ける顔へ配達夫
 初戀と冬の寒さの橋で逢ひ
 はかなきはピントガラスに寄する戀
 秋雨に反古を調べに餘念なし
 大望をいだいて肥えられぬ男
 空想かさめてる窓へ雪の音
 風吹けば又かと思ふ水害地
 晩酌をたしなめる子の理科の智恵
 義捐金集める人の手にダイヤ
 求道の朝燈臺が眞白だ

尾ヶ崎

高知

大阪

同

松江

大阪

高松

鹽ヶ池

金澤

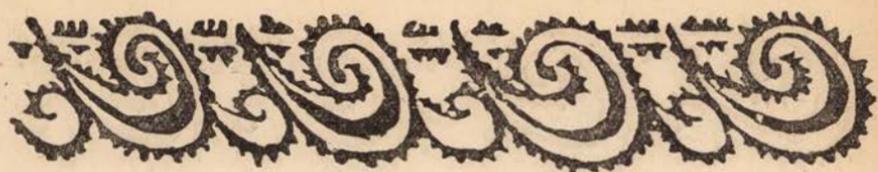
大阪

同

京都

今拾

正柳
 同
 劍山紫
 同
 歌都路
 同
 花鳥
 同
 同
 祥月
 白葉
 柳夢
 巷巴
 綠水
 ライト
 阜山
 正祐
 輝親



ルンベンが達者に見へる薬瓶
 兄は兄俺は金などためぬ主義
 自惚れてゐれば世間は面白し
 焚き乍ら掃く母親の朝忙し
 見違へる程に女工の公休日
 「愛嬌があるわ」と女給出齒をほめ
 除夜の鐘わたしの心となつて聞く
 仕立娘の足がしびれるお晝前
 賃掛きの素通りを見る吾子供
 屋臺店腰から下へ冬の風
 凶作の國から太つた娘来る
 あきらめてゐます女の腫をさける
 受取りはやつと待たせた火へあぶり
 大臣は鼻の態も批評され
 夜店の灯何處かで欠伸きかされる
 冬の宵みんなふところ手したがた
 看護婦さんその明眸が罪ですわね
 一同の希望が湧いてガバと起き

大阪	盛ヶ池	大阪	和歌山	大阪	名古屋	岐阜	大阪	盛ヶ池	東京	名古屋	盛ヶ池	大阪	竹原	今治	京都	名古屋	大阪	竹原
珍虎太夫	澄魚	東翠	百文	正夫	呂香	武絲	まさじ	錦雀	不二號	長樂	影法子	遊星	芳泉	鮮山	白英	十靜	彌生	

武玉川二篇研究

(一〇)

一日のぼふをうり
 くりもちらばり
 風もあやむ
 秋まていれ
 燈や人ハ口ハ
 年ハあつ

眞延西末初秋 江府三田町万屋清兵衛板

(312) こんにやく桶をこほす吊

秋の屋 葬式の時に出す強飯に、蒟蒻の煮染を添へるので、それを桶に入れたまま買求めて置いたのを、混雑の際に轉覆したのである。

東 魚 蕪藪桶を覆すと云ふ處に、大弔の趣がうかがはれると思ふ。

省 二 老母の急逝にあひ、お精進に一ケの解釋を得た。此句面白と思ふ。

(313) 八十七は手をおてる年

秋の屋 來年は米字の賀だが、夫れまではどうも、と額に手を當てるのではない歟。

東 魚 「手をあてる」と云ふのは、大事にかけて、無事であ

梅 本 秋 の 屋
 森 子 東 省 二 魚

れと念ずる心持のやうに思ふ。「お花見のすむまで空へ手をあてる」の例がある。

省 二 翌年の米字迄は、大丈夫といふお喜びの句だと思つてゐた。

(314) 外を見ながら這入乗もの

秋の屋 例の中條流の女醫の玄關である。

東 魚 乗物を玄關へかき込むのであらうか。或は中條から出て人の見ぬ中に、乗物の中へ這入るのであらうか。

省 二 どちらにでも解れる。例へば「外」をホカと讀めば、前解であらう、ソトと讀めば後説のやうにもとれる。が、乗物から出て中條へ這入るものと解してはゐた。

(315) 市迄は桶屋の夫婦身まぢゝめ

省 二 暮の市は新年用品を賣るためにたつ。桶も賣品の一種。弓をかい込むで桶をさげてくる。で桶屋夫婦と市迄は桶造りに大忙。あたりは桶だらけ。

秋の屋 二 「身を縮め」るにも及ぶまいに、氣の小さい夫婦だ。

東 魚 二 市の賣物を家中所狭く。慥へためて置くのを、かく詠んだのであらう。

(316) 葉せうかも笹の雫の振心

省 二 葉生姜は新生姜の事。葉をつけたまゝ市に出す。「葉生姜に市のうら枯見る日かな」(楓子)。葉生姜の洗はれた雫が落ちるのを思ひ比べたのである。「振心」は可。初秋採る、私はその香を好む。

秋の屋 二 生姜の葉と笹の葉は能く似て居て、水を打つと殊にすがくしてみえる。

東 魚 二 何となく爽やかな感じがする。「振心」が描き得て見逃がせぬ文字である。

(317) 惣領は土蔵へ向てものおもひ

省 二 惣領の甚六で、土蔵をみる度びに、將來の事を思ひおつとりとして居るのか、それ共、家運の上の責任でも感ずるといふのか。

秋の屋 二 この「惣領」は甚六の方で、土蔵の中の金品も、俺の

ものなる歎どう歎と、一人思案するのであらう。

東 魚 二 馳て、自分のものになるべきだと思ふものゝ、仲々自由にならぬ處が、物思の種であらう。

(318) 直きに妹と見えへる人代

省 二 なぜ直きなるか。これは前句の響からであらうが。

秋の屋 二 後からきた雇女が、前の雇女に諸事指圖されて働く故、それが妹と見えるのである。

東 魚 二 これも前句があれば「直き」などの味が充分受取れるのであらう。この句随分昔から問題になつてゐたのである。句意は前説の通りであらう。

(319) 律義に宿へ歸る節分

秋の屋 二 淺草寺の節分に參詣したが、入鞞の衰しさに、大門を潜らずに歸宅する。

東 魚 二 物堅い家では、節分などには一家揃つて、心祝の晩飯を共にするから、流石に遊び盛りの息子も律義に歸宅する——秋翁説の如くみるも面白い。

省 二 「宿」に考へさせられたが、家の意とすれば、律義と斷る點から、例の通りの入鞞でなくてはならぬ。

(320) 船の喧嘩の棒か流るゝ

秋の屋 二 棒は棹のことであらう。

東 魚 二 「棒が流るる」に滑稽味を感じはするが、これも前句

がないので物足らぬ心地がする。

省 二 喧嘩だから棒といつたのかもしれないが、棒で充分光景も描かれる。

(321) 一ツはちすのもめる後添

秋の屋 極楽とても安住の地ではない。

東 魚 〓 おかし味がある。これは獨立句としても面白い。

省 二 眞中にはさまつたハスは押しつぶされてしまふ。

基督教では天國に於ては、夫婦關係はないのだから、もめる筈はないのだが。

(322) ぐみかくはつて目鼻ちままる

秋の屋 〓 「ぐみ」は茱萸か、それにしても「かくはつて」の意が不明。

東 魚 〓 「ぐみがくばつて」ではないかとも思ふ。火に落ち燃える意にとつたのである。煙るために目鼻をしかめるとみるのだが、さればとてなぜ「ぐみ」を持つて来たのかが、解らなくなる。

省 二 〓 グミも實るに月の異なるがあつて、種類を別つ。この句山ぐみなるか。グミに對し句の如き何にか事柄があるものなりやを知らず。前句關係にて持出せしものならむか。

(323) むくらの宿へ夜くの客

東 魚 〓 前句なしでは想像がつかぬ。戀に關するなら、よき

人のお忍びか。或は又何か大事を相談し合ふやうな場合か、何れかであらう。

秋の屋 〓 連俳か茶湯か衰彦道か、執れ三者の一つであらう。

省 二 〓 「夜々」に色ツぼさを覺えたいのであるが、句面丈けでは手掛りなし。

(324) 山茶花を折て左官はしらぬ振

東 魚 〓 左官をどふして描出したのかキキ處が充分解らぬ。

(土を差出す椀などつけた棒で、得て木の枝など折りさうであるが)。尙、春を待つ家の手入れ時とすれば、山茶花の咲いてゐる景も合點は出来る。

秋の屋 〓 この「山茶花」は「さんくわ」と訓ませるのであらうが、さんくわならば「茶梅」と書く可きで、山茶花は「つばき」である。句意は前解通りに相違ない。

省 二 〓 山茶花は冬さくもの、「大言海」に、「山茶ノ類ニテ葉モ小サク葉ハ茶ノ葉ニ似テ花ハ冬ニ開ク淡紅又ハ白、單瓣アリ重瓣アリ、種類多シ實ハ櫻ノ實ニ似テ小サク微毛アリ油ヲ搾リ採ルベシ」とある。「山茶花やいはば椿のまた從弟(貞袋)で、茶櫻ともかく。なぜ左官を描き來たつたかは前句關係ならむも、然し獨立句としても感ずはる。急ぎの普請か。

(325) 起くは女の顔か大事也

東 魚 〓 起き出た時の氣分は、女が朗かな顔であるかと思ふかで、己れも快くなり、又憂鬱にもなる、とでもいふのかと思ふ

秋の屋 前夜には女菩薩とみえたのが、今朝は白粉が剝げ髪が亂れて、女夜叉ともみえるから、身だしなみが肝要である。

省 二 寝亂れた姿(特に顔)は、見せるな、といふのに等しからう。

(326) 損もなく遊んで歩行屋形舟

東 魚 屋形舟で遊び廻る連中であるから、金の入り目などにかゝわらない。従て取り巻き連など、何の費用もいらずに遊び廻ると云ふ意味合ひかと思ふ。

秋の屋 屋形舟の特色が表現されてゐない句で、遊んで歩く人物も判然しない。

省 二 獨立句としては、餘りに朦朧として居る。多分取巻連中の事なのであらうが。

(327) 行水こほす先を皆飛ぶ

省 二 「夕顔や行水すてる垣あかり(惟中)などに對應して味はひ得る句だ。|(それとも飛ぶのは虫なのですか)。

東 魚 捨てた行水が垣外へでも流れ出したのを、垣外を通る涼みの人々が飛び越え、行くと思ふのかと思つてゐた。

秋の屋 座五の虫ならば「皆」の字が不必要で、行水をこぼしたので潦ができて、其處を通る人達が飛ぶのである。

(328) 何ぞ鳴らして見たい護摩壇

省 二 護摩是燒義也、由護摩能燒除諸業。で乳木(段木)を

燒く。眞言宗などで實際を一見すると、仲々興味がある。頻りに佛に祈つて居るが、何んぞ鳴らしたい氣持になるものかの感じが起る。

東 魚 鈴などを一寸鳴らしてみたくないのであらう。

秋の屋 鈴ばかりでなく、金屬の小茶碗のやうな物も壇上に載せてある。

(329) 虫干に仕廻残して借し小袖

省 二 かし小袖の句は初篇にあつて解釋した。蓼太は別の視角から「虫干や今年はどれを貸小袖」。冬文には「虫干に小袖きてみる女哉」。

東 魚 貸小袖とは七夕に小袖を曝して、七夕にそれを貸すと云ふのであるから、虫干の時に今年の七夕には、この小袖にしようとして仕廻ひ残して置くのであらう。(星合や樟腦匂ふかし小袖、如江)

秋の屋 前解に能く盡されてゐる。

(330) 廣けた所怖しい夜着

省 二 「怖そふに見る虫干の夜着」(ケイ)、綿の厚い夜着は一寸怖しい感がする。

東 魚 三浦團を敷いて掛ける夜着ではないか。絢爛なのがいつそ怖しい氣分を誘ふではあるまいか。

秋の屋 大綿の木綿夜着などをみると、大江山酒頭童子の着物が聯想される。

(331) 柏の虫の臺所這ふ

東 魚 〓 柏餅を造つた、五月五日の臺所である。

秋の屋 〓 寫實らしい句である。

省 二 〓 この光景なごやかである。

(332) 短い袖に娘出兼

東 魚 〓 年相當に袖を短くしたのを、娘氣の尙袖を長くしたがつて、出にくがるのであらう。

秋の屋 〓 新年になつて他家の娘等は、振袖などを着飾るに、自分一人は短い袖で、外へ遊びに出る事もできない。これも全く貧ゆるである。

省 二 〓 二説いづれも可なりと思ふ。「短い袖」を明かに解釋する手づるが、句面にはないから。

(333) 棒の中行外科の挑灯

東 魚 〓 喧嘩か、なにかの怪我人で、取鎮めの役人の中を、現場へ醫者がやつてくる場合である。

秋の屋 〓 「棒の中行く」は、巧妙である。

省 二 〓 「挑灯」も亦、複雑味を描いて居る。

(334) 新尼のことはのほしに借しなくし

東 魚 〓 若い尼さんなので、ツイ同情もし氣もゆるして、巧く金を借りられる―穿つた句である。

秋の屋 〓 此の「新尼」は、鎌倉の東慶寺へ驅込んだ女で、他の尼寺の新尼では無からう。

省 二 〓 その新尼なれば、事柄からわく面白味も伴ふ。が、どの新尼でも感じは享入れらる。

(335) 鴨舟の掃除子が付て來

省 二 〓 「子が付て來」は、鴨舟であつて働く。「我のみか子にも教えて鴨飼舟」(直生)

東 魚 〓 亭主は夜を徹しての漁であらうから、船の掃除には女房が朝やつて來るので、女親について子が來るのであらう。

秋の屋 〓 父でも母でも、これを限定する要はなからう。

東 魚 〓 女親の方が、一層朝の漁夫の家庭情景に、ふさはしく思つたのみである。

(336) 蟹も恵方へ潜る身祝

省 二 〓 干干に因で得方を定める。身祝は自分を祝ふ謂。惠方へ潜くつて身祝の心持ちになるなどは、海士であつて一層あるべき事であらう。(別の参考句、「惠方にも向ふかしらや松囉子」貞常)

東 魚 〓 先づ仕事始めに、心祝に今年も幸であつてくれと、惠方へ向つて潜るといふので、ちと作爲が目立つが面白いと思ふ。

秋の屋 〓 「惠方へ潜る」といふから、蟹などを採る女蟹と思はれる。

(337) 先 媒 の な ひ く 吉 日

省 二 媒は目出度い盡して進行させねばならぬ。「先」が句の力。「仲人はめがね取出す段になり」で、吉日を見逃さぬ。
東 魚 吉とあれば、直ぐにも取計らひたいのが、媒の人情である。

秋の屋 句意は前解の如くであらうが、「なびく」の意が、少し判らぬ。

省 二 賛成或は主唱するの意ならむ。その氣になつてしまふの意ならむ。

(338) 風 車 外 山 の 松 の 吹 あ ま り

省 二 此句有名。川柳では「松」が「風」となつて居る。「松」が可。雑司ヶ谷鬼子母神の名物風車を詠むだもの。「雑司ヶ谷五色の風のまわるとこ」。

東 魚 風「風の吹きあまり」より「松の」の方が働きがある。風車とあるから、殊に風の字を重ねるのもまづい。

秋の屋 外山の風の句は、この句を剽窃したのであるが、原句よりも一段劣つてゐる。

(339) 隣 へ 行 ち 鶴 の 粧 ひ

東 魚 自分が良いだけに、一寸隣へ行くにしても、威儀を正してゆくと云ふのを、鶴の上品な悠々迫らぬ姿に、なぞらへたのであらう。

秋の屋 人物の身分が不明であるが、良家の女ではなくて、外妾などではない歟と思ふ。

省 二 「鶴の粧ひ」は、今日の言葉の「孔雀」のやうに着飾つて居る事ならむか。さすれば女性のこととなる。若し威儀の謂ならば男性の方にもとれる。

(340) 疱 瘡 の 後 に 仲 人 の 寄 付 す

東 魚 折角の美貌を疱瘡のため、目茶くにしてしまつたので、氣の毒でもありバツが悪いので、仲人も寄りつかぬ一世話をした當座は喜ばれたのにと云ふ心持。

秋の屋 多額の禮金を、せしめた手前もあり、迂濶に顔を出す事もできぬ。

(341) 娘 に あ て 、 譽 る 水 仙

東 魚 見事な水仙だと譽めるのは、活け主の娘に喜ばれたのである。

秋の屋 藪井竹庵老の詔諛でもあらう歟。

(342) 山 伏 の な ふ ら れ て 越 す 日 高 川

東 魚 清姫が追かけて来やしないなど、冷やかされる滑稽な場面。

秋の屋 山伏と日高川、餘り即き過ぎて興味が薄い。

省 二 世間一般の洒落などは、即きすぎたもの許りのやうである。

日本名所名物川柳

(東京の巻)

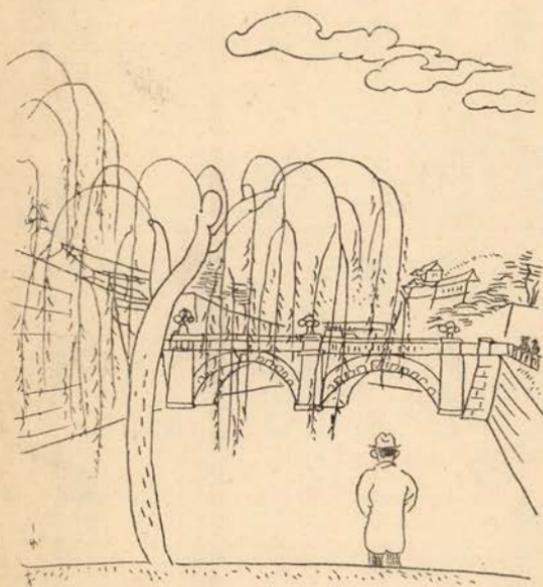
前田雀郎選
宮尾しげを畫

(一) 二重橋

日本に住む幸せの二重橋
 二重橋けふの佳き日を晴れに晴れ
 民草のいちばん親し二重橋
 二重橋静かに列の音となり
 二重橋兵隊さんが目立たない
 秋晴れに雲までうれし二重橋
 二重橋訛なまりへ鶯が晴れ
 二重橋そのまゝに雪とけて居る
 砂利を踏む音に静かな二重橋

史呂 久米雄
 琴峯 磯の人
 汀柳 歌都路
 久米雄 山海子
 美代坊 久雄

二重橋 觀光團もお叩頭する 水車
 二重橋 こゝから先は砂利の音 水客
 繪葉書のとほりだといふ二重橋 某人
 二重橋 説明なんぞゐらぬとこ 水煙
 二重橋 落した帯を母拾ひ 一吉
 二重橋 肩から下ろす團體旗 春光
 二重橋 祖國にことのある日なり 義風子
 鳳凰も舞へば舞はれる二重橋 曉童
 お袋の影が小さい二重橋 九史



風船を低く持つてる 二重橋 素描 番兵も拜がまれて居る 二重橋 東游
 二重橋映して日本晴れ渡り 紫陽 二重橋明日發つ形となつて來る 什七朗
 日本の一人となつて二重橋 史葉 二重橋それから先は雲の上 禿山
 二重橋錦の御旗見えてくる 利生 團體の顔に陽がある 二重橋 忠太郎

○投句募集

東京の巻 (二)

〔銀座〕 三句
 〆切 二月十日

同 (三)

〔向島〕 三句
 〆切 三月五日

以上宛先 本社事務所
 用紙 ハゲキ



句と理性

西田 艸 樂

川柳の詩的價值が高唱される。

太古、動物性人間に詩があつた。いや、その根源を禽獸に見るがよい。古今集の序文に

「花になく鶯水にすむ蛙の聲をさけば、生とし生けるもの何れか歌をよまざりける」

で、これ等動物性の詩歌は、官能の刺戟に微發された餘蘊なき叫びに始まる。

性殖の慾望は、聽て配偶者を求める聲となつて

「嵐吹く眞葛ヶ原になく鹿は怨みてのみや妻をこふらん」であり、「妻戀ふて鳴くかも知れず杜宇」でもあつた。

今一步この根原に遡れば、生物の各器官の、物理的化學的變化による撞動に因るのであつて、ダーウイニズムの無限境まで行く外はなからう。

人間の詩も、先づ斯様な源泉から流れて來て、喜び悲しみ笑ひ、愁ひて様々の詩を奏するが、既に人間となりし吾々は彼の禽獸の「まくばい」時に發する叫びに満足せざる事、申す迄もない。何が故に満足しないのか、乃ち人間に理性が出

來たからである。

可笑しいからと言つて、矢鱈に笑へば馬鹿に見える、嬉しいうから言つて、ありつたけの聲で高唱すれば醜い。そこに、理性の抑制があるから、ものは程よく納まつて行く。

詩の素因は直感の子である。詩は感すべきにして考ふべきものでない。然れども直感のみに委ねて満足な詩の表現は得られない。

詩は論理を超越する。論理や穿鑿は哲學の領域であると言ひながら、詩に無限の矛盾を許し得べきものではない。感情の奔放する處、リズムを破壊し、輪廓を定めず、風の如く捕捉し難くなるのである。

肉的人間の自然性は物に感じ歌ふであらう。靈的人間性はそれをよく制御して、或る統制の下に感情の發露を許すのであつて、詩に於ても亦理智的要素の重要なるを認めない譯に行かない。

凡理一如元旦のこゝろ知る 路 郎

誰か詩はヘツドの産物に非ず、ハートの叫びだと極言し得

るものがあらう。

茲に於て所謂新興川柳家を以つて自認する人々も、踏み外
しのない様に願つて置く。又俳人間にあり勝な川柳に對する
認識不足の點も正して置きたい。

川柳は理窟であるから詩でないといふ言ひ分。川柳は川柳
である前に詩でなければならぬといふ議論、これは一應尤
もである。併し川柳に或る程度の理智の要素が潜在するを以
て詩に非ずと早合點する者があれば、それは詩を知らない者
とせねばならない。

人間生活が複雑になり、體驗が積重り、智的發達を遂げて
詩が藝術的衣裳を要求されるに到ると、詩はアダム、イブの
時代からあつた、「天地の開けはじまりける時より出でにけ
り」で、伊弉諾、伊弉册の尊の、「あなえやし、えをとこ」「あ
なえやし、えをとめ」のまゝで満足し能はない。理智の發達
は様々の欲求を生じて來るから、當然そこに理智の分子が作
詩と、表現の上に拒み切れないのである。人間的欲求は、自
然詩も詠む、劇詩も詠む、宗教詩も詠む、概念詩も遂に現は
れざるを得ないのである。

川柳が人事對照の詩であつた處に、理性の働きは拒み切れ
なかつたのは當然ではなからうか。

せがむ子へ渡す湯 呑の 呑み加減

親たるもの、理性は、即ち作者の理性であり、そのまゝ句
に混入して來る。

無論詩に佳作と拙作あるを免れない。併し如何に拙作とい
へども、歌屑とされるものがあつても、散文とは自ら區別があ
る。従つて川柳にも所謂直感的の句もあれば、間接的描寫句
も生れる。

枯草に火を放ちたさくらへをり

閑 生

とした方が俳人が嬉ぶかも知れない。狹隘なる詩論家は貴
ぶかも知れないのである。然るに「くらへをり」が川柳家の持
つイデオロギーであり、慾求なのである。理性の統禦なので
はないか。

詩に託して宗教を語るものもある。詩の器に哲理を盛るも
のもある。社會の事件を詩的形式に演述する場合もある。個
人的な主觀的なもののみがよき川柳であると思つては、古川
柳如きその大部廢棄せねばなるまい。

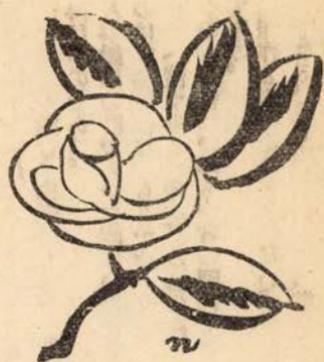
想像から生れたものにしても、世をはごかる句の一
あれさつねらせ給ひそと 芥川 古 句

潔癖者流の詩論家が、これは詩でない拒んでも、此の句
の味を捨て難い自分は、川柳とはどこまでも、川柳といふ型
の詩である事を主張して止まない。

つまり、もつと詩といふもの、眼界を展開して行けばい
のだ。日本には古來かういふ詩があるのだと思つて精進すれ
ばいゝのだ。時代々々によつて新しい内容を持つ句が生れ
て來ても、畢竟長くても圓くても瓜の蔓に生つたものは瓜な
ので、芋の臺に朝顔を繼いで、それは芋ではない。

上述する處、無論理窟ばつた句でいゝと言ふのではない。
感情によつて詩が萌芽しても、そこに渾然として理性的要求
の溶け込んで行く事を認めるのである。

川柳は常に着かず離れずの言葉が用意されてゐるのを無暗
に新らしがつて、月並調の俳句や、掛調、縁語からなる狂句
と、本當の川柳とを混同するから、此の拙稿が生れた所以で
ある。



川柳塔

路 郎 選

生 田 翠 夢

新春所感

雲の足猪突猛春と覺えたり

豊川稻荷にて

有難く百疊敷の隅に座し

東京新春行

門松の笹の長さに空つ風

信州松本にて

買炬燵朝餉のかなた鎗ヶ嶽

民郎氏に

君あれば信濃は何ぞ遠からん

西 田 舛 樂

ちと變にあまへる夜なり松の内

物入れた袂拂へば 打返し

見た事も無い親類と 呑む 遠年忌

吾れに應じ吾れに背くこと磯の波

山 本 丹 路

なにゆえとなき淋しさの本を閉づ

病人がおしえてくれた雨の音

酒がえがく夢びようくとして樂し

かゝる夜の雪女さへしたはしく

福田山雨樓

亡き母を偲ぶ

孝行をしに 大阪で 働いた

十二月二十三日に逝つた母

母の 目を 國民として うらむ 僕
腹の皮のばして 冬を 歩き 見ん

關本雅幽

讚美歌へ 遠く 住宅地はねむり
御下賜金髪なでつけて子を背負ひ
明けまして靴の泥さへ御目出度し
雑巾を主が持てば 健氣なる

春元紀太

想 舊 戀

斷ち切つた晒布一とすじ糸のひけ
時が 解決 時計 止つてる

橋本綠雨

白濱溫泉

縹袍着て 海岸に 立つ 松の内

○

吉田水車

大晦日 まだ用のある 下駄をぬぎ
ねえさん 冠りをとれば 元旦
あてらかて お國へつくす 白襪
慈善鍋 廢物利用に 候はす
様子もせねばならす 巴斯嬢忙しい
春團治さつぱりわやになり ける
長閑さは 驛長さんが水を撒き
田舎の子 銀貨を やると手を出さず
金割好き すぐ鉛筆と紙を出し
十四日 今日 義士がと 飲みに來る
貰ひ子の あはれは 錢を 大事がり

岡田某人

伊勢松阪、鈴廬舎の遺跡を訪ふ

身に泌みる冷えが疊にある遺跡

歳末

十二月暇だといへば見直され

市場没食子

あんたでは不足とばかり女給の眼
欠伸もう歸れと云はぬだけの事
威厳とやらに關する如く笑はない
親の轍踏むまい椅子を離そまい

妹尾 變人

デパートへ荷物を持ちに連れられる
紋付のない正月がすんでゆく
日給を考へてゐる寒さなり
死んでやるつもりだつたと仲直り

後藤 青兒

飯は子に炊かせ國防婦人會

唾ばかり落ちた師走のアスファルト

ポーナスは妻の指先から離れ

自殺者の批評は避けて死を悼み

水谷 鮎美

ひとり旅硝子の埃へ酒と書き

子がふたり夫婦は會話的になり

絹針に唇をつぐんで縫ふこゝろ

靜太さま

びようゐんのしろさにものがいへぬなり

西 いわを

信用をされてる座敷つとは入り

十八九大人なぶりをしてみたし

月未を拂ひそこねて目をめくり

玩具にと云ふて千圓出すピアノ

喜多 春秋

吸ひ込まれさうに變電所を覗き

腕組みは待たされてゐる馬力曳き
子供にもいゝ日と悪い日があつて

首藤 竹 楓

元町を戀人らしい包裝紙
口説かれて女冷たい目で笑ひ
すき壺へ親子五人の膝がしら

江戸みつる

憧れて來た大阪で女給をし
チンドン屋師走を外におどけてゐ

大阪で見る圓平人形

豚追ひの人形に考へ變へさゝれ

西村 明珠

ホールへ行つてゐますとはにかます
胎教とやらで合はない本を讀み
足袋はいてからアスピリン買ひに出る

須崎 豆秋

飯食はぬ顔修身を聞いてゐる
直角に質屋の中へ折れ込んだ
恩被せて置いて死ぬまでこき使ひ

中澤 濁水

別條はないかと隣盜られたり
學校林判り切つてる札が附き
押入れの此の邊で見ただけは知り

姫田 夕鐘

落ちぬれた椿のこゝろになりたまへ
色町でさばける人と思ひしに
催促に來て平凡な世辭となり

朝田 新水

吝嗇な人に税金ことづかり
まだ生きて居るかと暖簾くゞつて來
水の清さも正月や來る

荒井英賀夫

輪轉機 浮世がいやな日もあらん
あやまちがあやまちですむいゝ若さ
金借つてまで女は来いと言はなんだ

石丸 晴朗

初春の酒朗らかに つぎこぼし
コーヒーの香りも春の應接間
のめば酒のめるものなり 松の内

大鶴 喜由

捨てた男の幸を祈つてたのよ
鼻が高うなれくと添乳の手
妻のあるなしに女給かもてゐず

明石 柳次

抜けそうな櫛で猫を抱いてゐる
七輪をあふぐ姿の貧しくて
紅をとく指がつめたい 密柑の香

近藤 勇

泣かしてから僕にほれてる事を知り
退社して和服姿の日は續き
若さあり首を覺悟で論じたり

植山 九天

九州に歸國

先代が株で儲けた長い塀

役所

小半時待たして訓辭それつきり

町田 承春

借金の事とは別な招待狀

ふたりの世界となつた働こう

渡邊 曉童

葬儀委員長泣く子の鼻をかんでやり

茶柱へ五十の妻が来て座り

尾添 好郎

妻

死ぬる迄その純情で生きようぞ

宮岡 白峯

住友の裏で 巡査の懐手
指先も胸もふるへた 御下賜金

青木 史呂

母 病 臥 (三句)

叩き 甲斐なき母の肩 叩くなり
長煙管 つまつたまゝに母は病み

平井 春光

お・元日 エプロン 白き純喫茶
夕刊賣りへ盛り場の灯が消えてゆき

平井 與三郎

愛人を前に 夫へ逆ひし
松の内 記憶は飲んだことばかり

松下 小柳子

親切へ我が強情を淋しがり
眞面目なる故に出世を見のがしぬ

粒々集

御影 長崎 柳秀

警笛はうろたへさせる丈けに鳴り

正月が近い 女中の貰ひもの

手枕をとる 氣になれぬ 兒の寝顔

返盃を好きな 妓にとりつがせ

散髪の顔が 揃うた 拜賀式

茶碗むし 父の一人に冷えてゆき

あてのある 時の男は 優し過ぎ

二階借下へ 憚かる 娘に訪われ

湯ぶねから 玄關を 訊く 日曜日

松山 前田 五健

炬燵から 仰いだ 額にすまぬ文字

白足袋に ふむ 拜殿のこぼれ米

首卷のまゝで 勝手の 神拜み

佳い春だ 春だと 附和へ逆はず

理解した 事にして おく 平和主義

舞鶴 安川 久流美

み降りに 壘の上の お正月

鐵瓶が 沸いて 来るのもしづ心



月評
街の高臺

福西 田山 雨樓 艸樂

艸樂——今回は少し變つた方法であるが、草木の句を粗上に載せて見たい。本社の新年句會に於て、僕は「句と草木」の題下に貧弱な講演を試みた。途中で停電があつたり、少しく古文學、古句の話が長過ぎたりして、新しい川柳に就て語る時間が足りなかつたので、その時に持合せて居た愚見を、茲で述べて見たい。

此の間も話した事であるが、由來人事對照の詩である川柳に於ては、古句中にも草木を詠んだものとして、見るべきものが極めて多々たる有様であるが、近來の句には、さうでない中々佳句に乏しくない。

川柳家が續々草木を句にするのは、近時喜ばしい現象であるが、此の場合、矢張り川柳

家も、草木に對しては、俳句のねらひ所と變らないものが多く、従つて、俳柳一如を叫ばれる所以の一端も茲に存する譯であるが、俳柳一如といふ事に對しては、茲で議論する邊はないが、兎も角、私は川柳家に俳人のものし得ざる所謂川柳眼を以て草木の句をもつと作つて貰ひたいのである。

前置はこれ位にして、次の數句を見やう。

- 1 山はもみぢよ大根の葉が流れてゐる有爲郎
 - 2 木屋の香り女が先に賞め 稚仙
 - 3 月見草工夫の通ふ路があり 木主
 - 4 水害に逢つたご菊が咲きました 靜波
- 以上近作柳樟、次の一句は川柳塔
- 5 葉ぼたんを備切りそこねて風をひき夕鐘

右の中、(1)は表現はなる程川柳的表現といへやう、而も近代的表現と清新な描寫ではあるが、強いて調子をひねくつて見た形跡が覗かれる。併しそれよりも、此句の觀點は表現がさうであらうと、俳句のねらひ所と大差ない。それがいふの、悪いのと言ふのではない、川柳家らしい突込んだ所が、いや川柳でなければ詠めないといふ點はないと思ふ。

(2)(3)かうした自然界のものを、巧みに川柳化した功は認むべきである。句によつて自然景を再現し、而も人間味豊かな所が嬉しく思ふ。

(4)の句は取立て論ずる程の事は無い。只かう云つた句は、最近に大水害があつたので、

そうとうなづけるが、そんな事なぞ忘れて了つた頃に讀むと、菊が水害に逢つたといふ事が何等か前書でも欲くなるのではないか、水害當時には引きつけられる句であるが、何でもない時には菊そのものに味があまりないと思ふ。

(5)の葉はたんは、一の商品として見る草木である故に自然物の味が出なく、他の商品と同じやうな川柳味になつてゐる事は止むを得ない處である。師走も残り少くなつた或る日の夜店でもあらう、そんな所の情景の出した句である事には成功してゐるが、特に目新しい句ではない。茲に提出したのは、草木關係の句であるといふ點からであるに外ならない。

兎も角、古川柳に植物關係の句であれば桔梗が太田道灌の定紋であつたり、杜若が、在原業平の折句によんだ、彼の「唐衣着つ、なれにし」の歌の擲論であつたり、櫻が伊勢大輔の「今日九重に匂ふ八重櫻」をもちつた様な俗句が多いのに、近來、一寸雑誌を開いても眞面目な草木の句が立所に數句が拾へるといふ事を嬉しく思ふ。かういふ方面にも續々川柳畑の開拓を望む所から、此の度は斯様な出句の方法を探つた。

山雨樓——艸樂氏の講演を、僕は風邪で句會に缺席し拜聴出来なかつた(其後講演の要旨を聞く機会もなかつた)のは遺憾であるが、今茲に氏の持論の一端を知り得たのを幸ひ、僕の卑見を附加へることとする。

川柳に草木を主対とした句が、少いことは事實であるが、近來の句に草木がかなり取り入られてくるやうになつたことも事實である。しかし草木の句にあつても川柳としての味ひを失つてはならぬと云ふ艸樂氏の見方にも賛成である。僕は同じ様なことであるが少し違つた觀點から僕の考へを述べて見たい。これは單に草木に限らず所謂自然現象の總てについても同様であるが、川柳の主題はごん迄も人間を、人間の生活を、そして人間の思想を中心にして扱はれることが、本筋であつて、俳句の主題が自然の花鳥詠詠にあるのと、概念的にその風懷、妙味を異にすべきものだと思ふ。従つて草木を主材にした句にあつても、そこに濃い人間色が滲み出でなくては川柳としての魅力と生命を備へないのは當然である。路郎先生の名吟

君見たまへ蒨葎草が伸びてゐる
の如きは當時の俗流滔々たる 柳壇に一服の
清涼劑を投じたのみならず、その觀點、志向

並に表現共川柳の 에스プリ を感ぜしめる上に於て異彩を放つてゐることは、今更贅言を要しない。斯様にして川柳は何處迄も俳句と軌道を異にした進み方を忘れてはならぬと思ふ。

提出句五句の内有爲郎君の句は、なるほど俳句のれらひ、所を脱してゐないかも知れぬが、紅葉とか秋風とか云ふ、季節尊重の詩野の中に、「大根の葉」と云ふ人間生活の片鱗を示すものを捉え來たことは、そこに川柳の持ち味が迫つてくるやうに思ふ。

次に稚仙君の句は、「女」といふだけで、その人物がわからぬ爲めに平面描寫に終つてゐる。木主君の句は艸樂評に同感。靜波君の句は如何にも艸樂氏の感想通りであるが、靜波君はあの風水害の際も傷を負はれたとのことであるので、その苦しみの中にあつて靜かに菊の力強い本性を眺めたときの句だと思ふ。見ると、この句の尊さに引き付けられるのである。最後に夕鐘君の句は、この句の背景に同君の生活が顔を出してゐるやうで、面白と思ふ。特に新婚の第一春を迎えた夕鐘君なれば。

見馴れない賀狀にこれも妻のんか 緑 雨

掘り下げた結果女郎屋の風呂を焚き禿山
さし向ひ難煮の数は聞いておき夕鐘
妻たつしや大なる尻も拿けれ没食子
こうもりよ又ボーンナスが無さそうだ豆秋
氣がつけば私をまつていた野路司郎
山雨樓——作者の生活経験、性格、近況、心
境といつたものをある程度迄知つてゐてそ
の句を味ふことは、感興と刺激を受ける上
において諷刺からぬ効果があるものだ。これ等の
句が必ずしも作者の生活、或ひは近況なごか
ら生れたものであると云はぬが、各その作者
を知つてゐることによつて、これ等の句が
くまで勢ひよく僕のみところに入入り込む
ことを不思議にさへ思ふ。句に面して數刻、
そこへあり／＼と作者の顔を、姿を浮べるこ
とが出来、六句ともとり／＼に作者が滲み
出てゐると思ふ。其の意味で感銘が深いと共
に、恐らく句主としても忘れられない句の一
つだらうと思ふ。

である。没氏はせい／＼大なるお尻を尊んで
あれば間違ひなし。豆氏の心境、かくの如く
にして常に佳句を詠む。司氏未だ學生時代の
夢戀しといつた處、吾々はかうした句に接す
る毎に、その人々の音信を受けてゐるもので
嬉しい。

住込みの仲居はんきの好い仲居かほる
十二月お前の事もそりや思ひ春秋
おみくぢは末吉女手をおはせ竹楓
裏て會ふ女給財布のまゝ渡し虹一郎
儲けた日耳つ朶まで湯に浸り某人
霞、霞、お婆さんは風呂歸り巷二
山雨樓——前の六句とは反對に、此六句の作
者に對しては自分はその生活、経験、性格心
境等について餘り多くを知らない（一、二例
外はあるが）しかし句主は知らなくても句そ
のものが發散し齎らすところの藝術味を汲
取ることには大したさまたげはない。これ等
の何れもが描く川柳境はごちらかと云へば
作者の實生活から離れたと云ふよりは作
者の川柳創作上の反響作用から生れた一旬
のやうであるが、その齎らす川柳味に至つて
はいきなり陶酔を餘議されるものがあるこ
れはうま味と云ふか、洗練と云ふか兎に角快

速度で川柳の軌道を迂つてゐる句だと思ふ。
艸樂——凡て藝術品は何も言はずに、そこ
へ放り出して價値のあるものでなければい
けない。勿論作者を知つてゐるとか、彼氏の
生活はさうだからと云つた豫備知識に任し
て評すべきでない。只斯様な場合興味は増す
のであるが、作品の價値に迄立入るものでな
い。

従つて前書付の句なんかも、特に記念すべ
き事などの外濫りに付けるのはよくない。序
だから一言して置くが、前書は句の内容に一
つのことば、りを書いて置く場合に用ひても
よいが、前書に手傳はして句意を表はす様な
事になつてはならない。又課題吟の場合など
でも初心者は題と照し合せて始めて、句意を
表す様な事をする場合が往々にある。課題で
も、前書でも、そんなものはなしに句が獨立
して生命を持たねばならない。そんな意味よ
りして、句を見る時は、私は作者が知人であ
ると否とに不拘、句そのものだけを吟味する
のである。尙、選者として指導者として、作
家を賣て、行く場合に、一つの指導精神を以
て望む場合は自ら別問題である。又句によつ
て、作者の性格や、環境が伺はれる事は、句
に偽りのない證左なで、かほる氏、春秋氏と

いつた作家は、句含などで選句してゐても、直感的に作者が知れる事など恐ろしい程である。前掲の句にもいつものかほる氏、春秋氏に違ひない句である。須らく作家はかくありたいと思ふ。

○

欠伸さへ自棄にきこゆれ凶作地 天痴地

山雨樓——凶作地の窮乏と困苦は實に悲惨である。仕事も手に付かず空を仰いで長嘆息する農民の窮状は聞くに忍びない。それに欠伸など云ふの大きな悠長なものが出るとは、正に笑へない皮肉ではないかと見るところであるが、作者は更に中七の如く鋭い主観を投げ付けてゐるのである。想像や類推では到底生れない眞實味が句の鋭角を包んでゐる。艸樂——別段言ふ事はない。

借金の抵當にはならぬ子澤山 和郎

山雨樓——およそ常識的な理智的な解釋ではこの句の味はわかるまい。この句は作者の嘆息でなければ愚痴でもない。人生と云ふものを人間味と云ふ眼鏡を通じてのぞいて

ゐるのである。しかしそこに現代を否定する作者の思想のひらめきを見逃すことは出来ない。

艸樂——句は深い突込みがなければ洒脱に生きる。此の句の場合かうした軽さも亦嬉しい。私はそんな點から此の句を眺めたいのである。床の軸親和とやらが書き込んだ(古句)の境地に匹敵するものがある。因に抵當は(かた)と読み、調子の整つた佳い句だ。

長男が船に遅れた佛間の灯 青雨

山雨樓——高知と云ふ港の作者の句であることが、この句のリアリテイを色付けてゐる。この句は親の臨終(或ひは葬式)に間に合はなかつた前後のことを素材にしたのであるが、よくその空氣と事件とを叙し得てゐる。

艸樂——際なく難句に陥るを免れた思ひがする表現である。その點も少し死を強く下五に句はせた方がよくはないか、でも「佛間の灯」が重要な文字であるから、迂濶には觸られぬ。

十二月火鉢の火が消へてゐる 曼陀羅華

山雨樓——これが「十二月」或ひは「火鉢」と云ふ課題によつて作られた句であつたら見落されたかも知れない。そして表面の句想は只あるがまゝのことではない。が客観に徹した眼さして靜かに見返すならば——十二月は忙がしい月だと云ふ概念的季感があるにしても——この句が平凡の中からもよく物の眞髓を擷んでゐることが肯けると思ふ。

艸樂——即興詩はかうしたものである。ここには概念的の感じ以上のものがある。

奈良の鹿丁稚姿をなめてゐる 歌都路

山雨樓——この句も客観體であるが、そして鹿本位の叙法ではあるが、句の眞意は鹿になめられて嬉しがつてる丁稚の表情を眺めてゐるのである。そこにえも云はれぬ川柳味を認める。

艸樂——鹿さへも丁稚姿を輕んずるか、といった輕侮観で、ちよつと厭味が出さうになるが、さういふ所をほとんど隠した句の姿なした點は認めてよい。

誹

風

松

竹

梅

灘の生一本「松竹梅」のみながら、あるは侃々諤々たるもよくたらざるもよく、かにかくに愉にして快なる一日を持たうといふので、乙亥正月七日あしやの陶泓居へ相集ふもの、路郎東魚、蹄二、正光、縁雨、艸樂、汀柳、かほる、亂耽、と庵主南北を加へての總勢十人――。

陶泓居のおもてには「松竹梅」の數十の化粧函と、壯麗なる飾標との按配もよろしく、檜の上には蓬來の飾付けあり、尙ほ酒藏用の小短に灯を點じて支圓に一脈の野趣は漂はしめた所――皆夫々庵主自ら苦心の舞臺装置に新春謳歌の幕をまづは目出度く開ける

受付では着到簿に代へて、酒樽の鏡に署名、四門揮毫とあつて、短冊へ染筆をすまし、お土産頂戴――
その品々は（といふ程のものではないが）「松竹梅」のタオルにほひ線香「松竹梅」、南北筆のポスト、カード等、今日の會に因んだM D D E T A Iものばかりである。

「誹風」と稱するからには、少し作句もしなくてはといふので「松竹梅」「上戸」の二題を出す。之には朗かな異議を唱へる人も二三あつたが、「では三才に選者短冊を呈上」といふことにすると、おとなしく句箋を手にするまことに勝手な御人もあつて、和氣霽々裡に一同句作する。路郎、南北兩シエンションは作句に、選句にあるひは、揮毫とうちつやく川柳労働に悲鳴を擧げられる程の多忙さ。

東魚氏この間の空氣を即興吟として發表、曰く

題「松竹梅」 路郎選

高いから松竹梅をマダム好き 正光

松竹梅夜店の鼻が今日強し 艸樂

松竹梅元旦を梅一つ咲き 同

よせ書のこれで松竹梅になり 東魚

大臣になつて松竹梅もかき 同

松竹梅ですかとおそれる社員 亂耽

凡俗の御慶松竹梅が聞く 同

松竹梅貰ふたやうな飾りやう 南北

松竹梅へ無駄な辭儀を一つする 同

(人)松竹梅はたきが派手に使はき 艸樂

(地)松竹梅にほひ夫人もまた匂ひ 亂耽

(天)貧しくも松竹梅は床にあり 汀柳

(軸)松竹梅袴の皺もうれしけれ 路郎

於陶泓居
一月七日

の つ ご ひ

先生をこきつかふ日のおもしろさ

のむ程に、酔ふほどに、路郎氏はます／＼欣然と、綠雨氏は依然黙々と、正光氏の兄哥ぶりもよろしく、酒々たるスポーツ川柳氏、ニヤニヤたる紳樂氏、いよ／＼ハネ、左衛門的な汀柳氏今日は珍しく肅然たるかほるさん、蹄二氏のパー、パー、ズム、發揮の酒痴ぶり、牡蠣の如き庵主、しかして酔へないカンシ。朗笑、蒼笑、爆笑の渦巻く中に、ひとときは陶泓居、げに初春歡樂萬花鏡、――

のみ且つうたひ、かつ踊る中で、特に出色のものは、かほるさん得意のジャパニーズダンス、東魚氏のデパート式聲帯模寫蹄二氏の松鶴、春園治の聲色で、殊に東魚氏の久負持模寫に到つては九段老人まこと目の前におはします如き神技であつた。

たそがれどき、庭前に下り立つて記念撮影後、庵主作の凝りに凝つた福引で、揮毫品を頂戴、その後に来るものはまた酒、笑、酒低唱、高笑、酒、酒、ETC、のカクテルで、一同歡をつくして散會したのは午後八時半ごろであつた。

尚ほこのつどひに、御高配をたまはつた「松竹梅」酒造會社酒間をあつせんしていたゞいた馬場夫人、及びいろ／＼御迷惑をかけた陶泓居御一同様に午末筆厚く御禮申し上げます。

(LANTERN記)

題席「上戸」 南北選

女にももて、上戸のよく語り	綠
呑む人、呑むのも上戸なり	汀
場、場々、上戸夜が更ける	艸
長火鉢出が、出の女房いける也	東
上戸賞萬歳椅子で酔ふてゐる	路
陶泓居下戸は入るなど書々ど	正
盃の持ちやうを父褒めてやり	同
靴の、結びせ、上戸ま行く氣	路
一升はうれしい酒にしてしま	同
(人) 長廊下酒仙の後姿を見	乱
(地) 名人に上戸と云つて叱られる	路
(天) 鱈酒を半分残す泣上戸	正
(軸) ことしこそ死の上戸の面目さ	南

新春句會記念撮影

(向つて右より)

(第四列) 水咲 眞那 天國、おさむ、新市街、春光、青踏、水紫、水選、久文、水崎、弘、藤、おいを、木醉、八歩、石竹、豆萩、水耶 (第三列)



子細白、入牧、泉翠、々洋 (列二第) 路閣、呂史、三卯、由喜、樂高、音聞世、鬼子、峯白、鯉昇、芳玉、煙文、瀧藤、水紫、々選、久文、彦高、條、堂愚、柳汀、梨井、那路、光正、耽菴、入樂、天沐、滿夕、笑柳 列一第 波九、風角、オツナ、二和伊、方、九十里、美結

本社新春川柳大會

一月六日夜

於道頓堀俱樂部

猪突猛進といふ輝やかなしい昭和第十春にふさはしく、川柳界の魁けたる本社新春川柳大會は、歳旦の雑沓を他所に靜かに、そして新しい希望に燃ゆる川柳作家が一堂に會した、殊に新銳作家が多數に出席された事など本年の前途に光明を覺えさせられるものである。

西田艸樂氏の「句と草木」と題して古川柳の評釋より引いて、今日の川柳に草木を見直せと云ふ有益なる講演があり、續いて麻生路郎主幹は「牡丹の影」と題して「新春第一聲」の熱辯を振られた。各選者の披講終りて、本社選者の短冊を出席者全部に頒ち、記念撮影を行ひ十時盛況裡に散會を告げた。

出席者

(汀柳、九河記)

路郎先生、艸樂、與三郎、九波、喜由、おさむ、靜波、世聞音、水耶、牧人、琴泉、苦練、玉芳、柳笑、力修、變人、えいを、萬樂、節子、伊知二、愚堂、清彦、勵、角嵐、沐天、三碧、はじめ、夕鐘、亂耽、正光、子鬼、里十九、一夫、魚水、昇鯉、汀柳、彩泡、八歩、天國、新市街、靖弘、鮎美、木醉、滿潮、洋々、史呂、紫水、白峯、白柳子、卯三、文蝶

波郎、文久、溪々、青踏、水咲、豆萩、石竹、聞路、萬よし、春光

席題 餅花 互選

餅花がまた氣にかゝる子猫にて
満員の額餅花の下へ吊る
餅花を一つちぎつた小原良節
餅花へねすみ嬉しい夜が續き
嬉しさに餅花ちよつと揺れるなり
未つ子の劍に餅花二つ落ち
餅花へ少さく見える招き猫
餅花へレコードの針足らぬなり
餅花へ金はチツプに足りるだけ
餅花をくしやくもて酔ひつづれ
幾春も吊る餅花の釘のあと
デザートの高き下がる餅の花
餅花の下にナンパイヤンの顔
餅花へ下で欲しいもの一つあり
餅花に風を見つけた酔がさめ
餅花の小判へ冬の堀二匹
髪結ふて姉餅花へ手傳はず
餅花へ高髷がさばつた聲になり
赤ん坊の眼に餅花が撮つてる
餅花をつぶすと何か出そうなり

木醉、紫水、おさむ、水耶、喜由、昇鯉、史呂、八歩、高樂、昇鯉、世聞音、牧人、正光、萬よし、角嵐、靜波、史呂、艸樂、夕鐘、角嵐、水耶

餅花をござう抄ひの箒がはれ 喜由
 餅花の鶴が島田へひつが、り 彩池
 (三點)餅花をゆすゞけの小競合 木醉
 餅花の下へ追ひつめられてゐる 同

席題 舊友 正 光選

舊友をひがませまいの風姿を乞ひ 萬樂
 舊友を補佐してやる氣理事の橋、 世間音
 年賀狀から舊友の趣味を知る 萬樂
 生活の話 舊友何故か避け 水咲
 椅子で飲むことを舊友淋しがり 青踏
 舊友の酒癖嬉しいものゝうち 萬よし
 (佳)舊友の編輯後記面白し 白柳子
 (同)舊友へ家鳴震動させて酒 角嵐
 (同)舊友は飲んで歸つただけの事 魚水
 (同)舊友に昨夜しやべった疲れが出 亂耽
 (同)舊友を温め妻を引合せ 波郎
 (人)留守に来て舊友晝寝してるも、 水咲
 (地)舊友と書齋の塵の中にある 亂耽
 (天)すゝけた葉書舊友に用が出來 白柳子
 (軸)幼名を呼んで舊友酔ひ足りる 正光

席題 早寝 亂 耽選

早寝して雜謔の誤植見つけたり 満潮
 早寝して土産の鮓に起される 水咲
 早寝もう明日の思案がついてゐる 文蝶
 放送を聞いてゐる母の高軒 里十九
 早寝から手紙の返事思出し 八歩
 早寝の街へはつきりと冬の月 正光
 早寝してまだ純情を捨て切れず 青踏
 さいころが轉ぶ早寝の枕元 天國
 もう寝たのかと悪友に襲はれる 正光
 もう何時頃かと早寝眼をさまし 昇鯉
 たまの早寝へ水が洩れてゐる 豆秋
 早寝して真夜中窓に字を重ね 子鬼
 今晚は早寝晚酌つけさせる 春光
 早寝する雨戸に見える白椿 鮎美

席題 小唄 夕 鐘選

いゝ小唄撥は忘れたやうにある 波郎
 幹事から下田小唄を所望され 萬よし
 三味の音にもつれて小唄消ゆるも、 一夫
 こゝからは小唄のまじる毛糸針 萬樂
 母に聴くさいむかしの小唄なり 青踏
 唄ひます酔ひます宵の絃にのり 鮎美
 新妻が煙れる中に小唄なご 沐天
 飲めばすぐ好きな小唄の節廻し 同

過去があり小唄の好きな父なりき 節子
 口ずさむ妻の小唄は過去に觸れ 同
 泌々と小唄を聞けば雨の音 白柳子
 覺えある小唄へ春の窓が開き 水郎
 狂人の小唄悲しく聞くばかり 柳笑
 片戀の Coppie に酔えぬ小唄聴く 新市街
 流行の小唄の通り世は動き 世間音
 紫を好み小唄が上手なり 青踏
 ぐてら着て西條八十の唄になり 豆秋
 當選の小唄へ難をつけてみる 萬樂
 交通が持て餘してゐる勝太郎 清彦
 口ずさむ姉の小唄は淋しませ 沐天
 行燈をつけて小唄の影二つ 鮎美
 なるやうになつた宵なり小唄なり 變人
 ジャズ小唄二人の足が揃ふなり 同
 淵の小唄町の小唄の旅をする 紫水
 懐しい小唄故郷思ひ出し 柳笑
 繩暖簾小唄は肩で押開ける 牧人

席題 玩具 汀 柳選

貧しさの中を玩具で喜ばせ 柳笑
 死んだ子の玩具を出して遊びけり 苦練
 うっかりと大人玩具を毀すなり 木醉
 玩具店出て不足ない子の歩み 節子

玩具箱ぶつちやけたまゝ、紙芝居	玩具箱鏡の破れたコンバクト	玩具箱静まつてゐる三ヶ日	鏡かぶと玩具箱に巾を取り	ふところに汽車を預り手をつなぐ	父一人子一人玩具哀れなり	母なき子玩具の數へよく遊び	裏長屋訪へば小石と遊んで居	玩具箱奥越同舟塵の中	子の手には玩具父の手にお酒	玩具・玩具面白くもない子守	しばしは寝かす玩具の山の中	かにかくに玩具と遊ぶ夫人にて	贅澤な玩具の傍に下女がつき	おとなしい玩具の横の針仕事	童心である玩具部の女店員	玩具箱子の病室へ運ばれる	隣からまた見せつけにくる玩具	一人兒の玩具で座敷狭くなり	滿洲の土産三勇士の玩具	玩具持つ子に病葉の散る陽向	坊やの刀に父母撫で斬られ	ポケットの玩具を女給見逃さず
洋々	同	同	同	文久	八歩	同	同	萬よし	沐天	石竹	白柳子	亂耽	波郎	同	史呂	同	喜由	同	白峯	新市街	水咲	正光

玩具店大人の欲しいものもあり
玩具店 流線型は外へ出し 同
玩具店次から次へホシをかけ 彩泡
酔ふてゐる男玩具は手離さず 三碧
玩具箱の中に銚子が一つあり 同
いゝバ、となりて玩具の國にあり 鮎美

買初にまだ寝不足な女なり 子鬼
屠蘇氣分ちと買物をはすみ過ぎ 彩泡
買初へ子供の無理も聞いてやり 史呂
買初の店は借りなごない所 變人
買初はまだ出揃はぬ店へ来る 文蝶
買初はあつさり買ふてくれるなり 夕鐘

本社二月例会

どうやら正月気分も薄らいだので、落ちついて句が作りたい。で今回は會場として街の雑音が聞えぬ明るい本社 of 廣間に決めました。

日時 二月六日(水)午後六時

兼題 「足 並」 三句 麻生路郎選

講演 「或る小説の話」 麻生路郎

會費 三十錢

○上汐町一丁目の本社事務所は

上本町四丁目バス停留所を西へ約一丁、始めの四ッ辻を南に折れると左に見え
る洋館

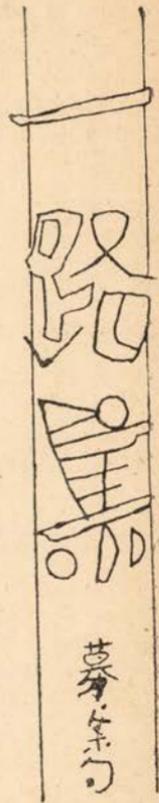
玩具淋しく朝の陽があたり 同
(軸)散らばれる玩具の中に子笑顔 汀柳

買初へ銅貨は一寸横へやり 昇鯉
買初の遅い御慶の立話 波郎
買初に今年の運は悪くなし 正光

兼題 買初 路 郎選
買初は妻の意見に逆はず 三碧

喰道楽を叱つて妻は買初に 小芋仙
奥様の主張買初しに出かけ おさむ
買初はやはり子供の物になり 卯三

(人)買初に夫としての腹を見せ 明珠
(地)買初に使にされて白い足袋 變人
(天)買初の子の物は子に提げさる 豆秋



自慢 長崎柳秀選

自慢して飛車を落して敗になり 柳夢
 御自慢の一粒種は氣がよすぎ 双亭
 頭梁の自慢柱の目を云ひ 葉魚
 國鐵の自慢流線型のグロ 久米雄
 肩書と別に自慢のかくし藝 たけを
 自慢話そうか／＼にものたらす 紫陽
 合榎へ自慢ます／＼のり氣なり 蛙庵
 自慢するのではない髻を撫で 天國
 學歴のないが自慢の一つなり 葉光
 御自慢の菊を賞めたら酒になり 光子
 山登り自慢は先に草臥れる 玉芳
 小鉢物 板場自慢の腕があり 崙喜固萬
 自慢した事がくやしい子の疑獄 春帆
 自慢する對手は酒を飲みつけ 花鳥
 上り湯で自慢話を一つ聞き 長樂
 二十餘年 世界へ誇る神の國令 風
 見學へ我社の誇る輪轉機 寒草

その時の疵だと腕をまくり上げ 三男坊
 高慢な心何時しか獨り居る 芳泉
 それ／＼の自慢がつきぬ焚火の輪 承春
 不孝者親を自慢に金を借り 禿山
 町内の自慢は木綿着の小町 非常兒
 合榎を打たれて自慢息をつぎ 曉童
 不良とは知らず我子を賞め歩き 菊路
 競馬狂 自慢しながら金を借り 山海子
 自慢する庭木三尺帯がたれ 新市街
 子の自慢窓の入陽がまぶしいよ 青兒
 欠伸悸えて自慢話をさく 史呂
 唯一の自慢は従軍 記章なり 正祐
 御自慢の庭とにかく褒めておこ 利生
 座談會 自慢と自慢鼻をつき 同
 親類の事も話につけ加へ 正柳
 駄目ですと云々見せてる菊の花 喜子
 感 吟
 獵自慢犬の手柄は忘れられ 紅

お返事

△中西おさむ君は元旦に宮島へ参詣されま

した。

△頰春へ空は晴れたりいづく島(おさむ)

△京都の子鬼、甫三、司郎、黄子朗、治一

郎、陸平の諸君は一月三日城崎温泉に行

かれた寄書を頂きました。

△名古屋三香會の可香・呂香、世香の三君

は一月三日來阪本社事務所及路郎主幹宅

へ來訪されました。

△村田周魚氏は三日伊勢大廟へ参拜されま

した。

△富士野鞍馬氏は一月五日東京を立立三十

口頃まで北海道へ旅行されました。

一人旅冬のビールに味があり

湯に浸るだけなる雪の温泉場(鞍馬)

△東京の柳友會の新年句會二月七日 席上

より寄書を頂きました。

△名古屋微風會新年句會は八日に催され寄

なる程と聞けば老人得意がり 雅星
町内で歳頭なり九十三 彌生
人間の自慢の一つ家を建て 史郎

面會

軸 吟

父兄會賞めやうのある親の愛 柳秀
棺蓋うてからの自慢たまあ飲まき 同

市場 田夕鐘共選
場 汐 食 子

夕鐘選

音させて掛ける面會謝絶札 錦城子
面會所たれかのぞいてゐるさうさ 武絲
代表の聲嘎れて署長室 令風
堂々と面會をして強請つてゐる 烏鬼作
面會もなく出征の船に乗り 三碧
面會の顔と履歴書見較べる 雅星
面會に來れば歩哨に立つてゐる 史呂
タイピスト面談すれば地味な人 美津女
面會の母の白髪にわびるなり 斐光
會ひに來てちと失望をして歸り 春帆
明日にしてくれと面會斷られ 利生
面會に行き新らしく名をよばれ 綠水
面會所口は四角な初年兵 白峯
本當の姿で名刺受けとられ 歌都路
待たされる覺悟面會何か書き 花鳥
面會を迫る ガラスの割れる音 木履
鼻息を感じて書生留守にする 紫陽

面會へ守衛つれなく居る社則 紅
面會へ嬉しい話持つて來る いわを
運命の面會さへもまよならず 節子
面會へ落つかする應接間 正柳
面會へ云ひ忘れたをふと氣付き 白英
面會は謝絶戻りはきつい降り 秃山
結局は無駄足だった門を出で 葉魚
四十度の熱と面會きいただけ 朝雨
面會へ警衛がゐる 儲けやう 曉童
面會は廊下を軽い音でさり 祥月
面會の悲劇の筋が出来上り 天國
面會の約束つひに反古になり 柳夢
肝心の事を面會云ひ残し 菊路
面會の女素性を疑はれ 史郎
面會のその服装を見直され 崙喜固轟
親しめぬまゝ面會を別れて來 同
大臣と云ふ肩書で會つてやり 同
面會の母の背中で寝てしまひ 同

△國澤春水君は一月十日本社事務所へ來訪

され夜御旅支部の句會に出席されました。

△白柳子居新年小集十日に催され寄書を頂

きました。

△小川百雷君は山村夏子嬢と岸本水府氏夫

妻の媒酌で華燭の典を擧げられ、其のお

祝の會は十二月 心交社食堂で催されまし

た。

△橋本線兩君夫妻は一月十八日 紀州白濱温

泉に遊ばれました。

温泉へ二人で來るは始めなり (美那子)

白濱は松原續きに湯の匂ひ (綠雨)

△伊勢大廟に十八日参拜されたる舟々、新

水・規堂三君より寄書を頂きました。

△岸本水府氏は十九日BKより「八百八橋」

を放送されました。

△庄萬よし君は一月二十四日、公用で東上

された歸途信州諏訪湖で半日スケートの

快味を味はれました。

スケートへ残月はまだ峯にあり

△高知支部一月例會は二十二日に催され寄

書を頂きました。

△今治支部幹事交代の夕は二十四日川柳庵

で催され寄書を頂きました。

△阪井久良伎翁六十七回誕辰祝賀會は廿五

面會へ化粧の時間待たされる 青兒
用件を言つて面會断られ 同
久方に面會をするうろおぼえ 呂香
面會所隅に小さく母がゐる 同
面會へ金の工面を又殖やし 久米雄
面會所今年の米の出来も云ひ 同
面會へおもむろに出す紹介狀 蛙庵
面會のあまり好感持てざりき 同

(五 客)

張り切つて乳房が痛む面會所 錦城子
面會をやつとボイラの下へ告げ 山海子
面會が退社時間を狭う待ち いの助
平凡な對話の中でさぐり合ひ 芳泉
瘦せた顔だけを面會見て戻り 菊路
(人)面會所だまつて父は金をくれ 令風
(地)面會に曇る腫を拂ふなり 新市街
(天)面會へ温まる物を提げて母 水煙
(軸)ほろにがさぶぶを穿賀川服 夕鐘

◇ 夜食子選

つれて来た犬も尾をふる面會所 三代吉
面會が女と聞いた慌てやう 非常兒
待たされる覺悟面會何か書き 花鳥
面會と云はれ無口なサラリーマン 歌都路
面會のまだ待たされる 應接間 寒草

面會に女の話盡きぬなり 來翠
面會があつた女給へはやしたて 牧人
不在なら明日また來ます寄附で 世間音
面會を別に見付けた戎橋 百文
面會のその服装を見直され 嵩喜園高
タイピスト面會すれば地味な人 美津女
面會所誰か覗いてゐるやうなり 武緑

○

面會は顔だけ見える窓に立ち 木履
面會へてもよく廻る煽風機 久米雄
面會へ恩師昔の儘であり 水煙
陳情は知事直々に面會し 雅星
晋させて掛ける面會謝絶札 錦城子
面會日履歴書の山見て戻り 皐山
面會に來てゐるバット待疲れ 史葉
面會の女素性を疑はれ 史郎
秋の夜を語る久方ぶりの父 祥月
面會の二人へ時の刻まれて 綠水
面會へおもむろに出す紹介狀 蛙庵
面會に出れば月賦の請求書 双亭
面會の勞資ゆづらず殺氣立つ 青柳
面會人立つたり坐つたり窓見 喜子
面會へ給任せわしく昇り降り いの助
面會に悲劇の筋が出來上り 天國

日東京王子扇屋に於て催されました。

△神戸支部の旬會は二十七日華水居に於て催され寄書を頂きました。

△高島玉兔朗氏令聞かれさんは舊臘逝去されましたが、一月二十七日正午同氏宅に於て告別式を営まれました。本社よりは亂耽君が代表して會葬されました。

△瀨沼九光君は東北川柳の白河能因會で活躍されておました方、病氣の處舊臘十二月二十六日藥石効無く遂に長逝されました、謹んで哀悼の意を表します。

△本社八東支部のある島根縣津田村が、松江市と合併された爲め支部も松江支部と合

流されました、尙同支部は本年五週年を迎へる爲め目下五週年記念川柳大會の計劃が着々進捗されておます。

△劍花坊句碑建立の基金募集を發表されました、建立期日は昭和十年秋の豫定、場所及代表句の選定は未定、募集基金一口

金五十錢とし(一人幾口にても可)一切は五月末日、届先は東京市中野區大和町二

八二、柳樽寺川柳會宛、振替は東京三三六一番です。

面會所せめてそこ迄出れるなら 玉芳
 おごそかに面會謝絶貼り出され 節子
 面會へ手切紙幣と言はず出し 葉光
 面會に行くよと友の入營日 彌生
 面會の母がうれしい擧手の禮 春帆
 明日にしてくれと面會斷られ 利生
 無精髭も懐し父の面會 白英
 母と會ふ女給淋しいネオンの灯 正祐
 代表が待たされてゐる 應接間 長樂
 面會へ中から留守と言へといふ 正柳
 面會謝絶事務所一人二人ゐる 紫陽
 面會は損得などにかゝわらず 柳夢
 面會は藝者と知つたさわざなり 小樓
 父よ子よ面會室の國訛り 名香
 さて會へば社長も熱のある御仁 紅魚
 面會に話愈々絡んで來 葉魚
 肝心の事を面會云ひ殘し 菊路
 瘦せた顔だけを面會見て戻り 同
 面會に名刺一枚先に來る 新市街
 面會に曇る臆を拂ふなり 同
 住 句
 面會へ嬉しい話持つて來る いわを
 晴れて來る窓を面會あけて見る 曉童
 面會は謝絶戻りのきつい雨 禿山

用件を云つて面會斷られ 青兒
 面會をさけて自家用走りゐる 白峰
 面會所親を待たして手を洗ひ 名香
 面會に來れば歩哨に立つてゐた 史呂
 堂々と面會をして強請つて居 烏鬼作
 威嚴を見せて代表と會ひ 芳泉
 秘書の出す金一封へ目もくれず 朝雨
 四十度の熱と面會聞いただけ 同
 面會へ太いステツキついて來る たけを
 大臣と云ふ肩書で會つてやり 同
 面會謝絶注射でもたしとき 同
 (人)面會をやつとポイラ。下(告) 山海子
 (地)逢へば又涙となり獄舎の灯 令風
 (天)面會もなく出征の船に乗り 三碧
 (軸)面會は出來ず差入して歸り 没食子

川柳パイロット欄

次 題

「眼」十句以内
 〆切 二月十日
 宛先 本社事務所
 用紙 ハガキ又は同形紙

△福田山雨樓君は一月下旬、松坂、和歌山各地へ出張されました。
 △植山九天君は三十一日令嬢病氣の爲め九州へ歸省され、「咳きこむ子がゐて船足かのろいなり」の句をスミレ丸の船中より寄せられました。

轉 居

△森田一二君(名古屋市東區大曾根町鐵道官舎五三號ノ一)
 △今中清春君(京都市三條通大宮西へ二丁目)

△小川百雷君(大阪市住吉區天下茶屋二ノ一)

正 誤

前號川柳塔の吉田水車君の句、蛙とあるは鶴の誤りです。

大阪にお池の鶴もよこれたり

社 告

△岡田某人君は本社同人として入社され社章を交附しました。
 △行人會を支部として承認、幹事に平井春光氏が就任されました。
 △益ヶ池支部幹事は福田浮鬼君に、松江支部幹事は岡崎祥月君に、今治支部幹事は曾我部啓明君が新任されました。

橋本線雨氏祝賀の夕

本社功勞章授與式

一月十七日夜、川柳雜誌社俱樂部に於て本社前總務として多年功績のあつた線雨氏表彰の功勞章は麻生路郎主幹より授與されたり引續き祝賀宴に移つた。

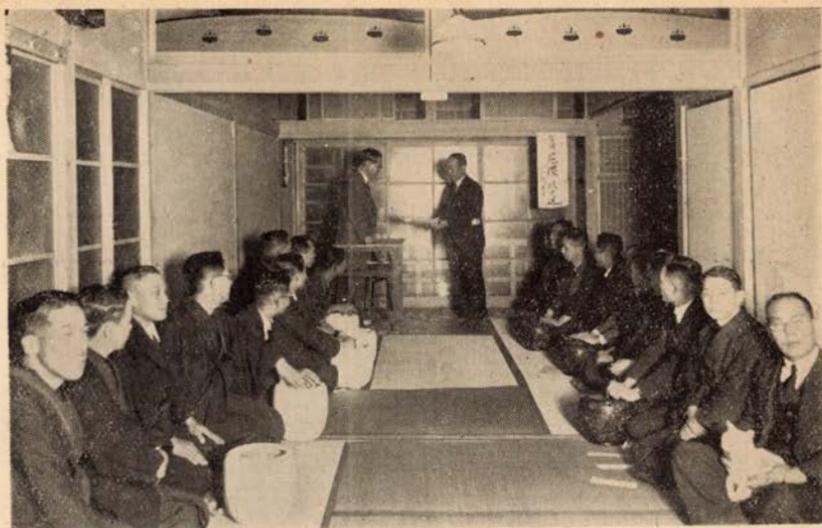
路郎主幹は名を成すものに二つの道がある所謂天才と一ブラス一即ち努力の推積とである。一ブラス一は何んびとでも成し得られるものであるが、一ブラスが漸次重なつて千が萬になり、億が兆になる行き方を完成した人はわが線雨君である旨を述べられ、之に對し線雨氏のは第二卷八號より事務所を引受けられ大過なく今日に至つた事は同人皆様の援助によるものと謝辭を述べられた。

次いで客員森東魚氏は、川柳界初つて以來の美舉でありこんなには有難い事はないと述べられ、總務山本雨迷氏は日本人の底力

を見せた線雨氏を讃へ、編輯長福田山雨樓氏は線雨氏の不言實行に大いに感化された。そして今後と雖も社内居られるのだから益々盡瘁されたいと希望し當日幹事代表庄万よし氏は北國の人の根強さを語り、夫れ線雨氏激賞の言葉に今後とも本社の爲め相變らぬ盡力ありたい旨述べられて内寛るいだ酒宴となつた。出席者全部が一人づゝ立つて隠し藝をやるなど未だ曾てない盛況を極めた。

(出席者)

路郎先生、線雨、東魚、紳樂、山雨樓、雨迷、汀柳、乱耽、翠夢、かほる、雅幽、鶴峯、柳次、萬よし、九天、新水、青兒、いわな、史呂、水車、禿山、里十九、春光、夕鐘、豆秋





兼題 花 輪 縁 雨 選

のき店にしては花輪の多いこと 史 呂
 タクシーは花環の客をうるさがり 豆 秋
 花輪から手品の種が見へてゐる 禿 山
 飛行服のまんま花環に首を出し 水 車
 樂屋裏の花輪の一つ倒けたまゝ 里 十
 花環なご隣りへおいて賑はしく 艸 樂
 横町へ花環がはみ出るいゝ景氣 萬 一
 笑はればならぬ花環へ笑ふとき 雨 迷
 暫らくは花環の中に夢とある 雨 迷
 感激に燃えて花環の赤いこと いわを
 代表の花環一段高いこと 同
 初舞臺花環の数も有難し 同
 (佳)交際を花環の数に見せてゐる 春 光
 (同)匿名の花環へ顔を埋むなる 一 徹
 (佳)晴着の袖が花輪にひつかゝり かほる
 (同)ステーションの花環々々を縫ひ出 艸 樂
 (同)喜びがまたこみ上げてゐる花環 山 雨 樓
 (同)夫れゝの意味で花環は並べ 萬 一
 (同)喜びの帯花環にふれてゐる 柳 次
 (同)肩のこり忘れ花環の下を掃き 同

酒 中 吟

見わたせば禿山一つ首をふり 東 魚

萬歳が出て土匪吟がしまひなり 同
 意見するかまへ神農うたをやり 同
 神樂は相談つくのうたをやめ 同
 承るたんび雨迷はうれしそ 同
 神農の最後女を口説きかけ 同
 平右衛門洋服をきて市舎に出 同
 平右衛門ホンブのやうなみとり 同
 本望を遂げたかほるの類冠り 同
 ごうしても連れてく里十九風の 同
 おゝきいふとかほるはあごを撫で 同
 でえや〜といふうちに二人酔ひ 同
 禿山とかほる花月けながり 同
 黙々と出て黙々と縁雨すみ 同
 長火鉢ないを汀柳淋しがり 同
 神農もちつと手品を遊ばされ 同
 呑むことになると萬一異議は 同
 かくし藝、僕はめがれをふませう 同
 わかつた〜と謡曲をかたづける 同
 かほるさん未だ立ちたも酒を呑み 同
 ビンポンと別に雨迷のはしやぎ 同
 かほる君とにかく下げをつけて 同
 萬よしとコンビでかほるめいせ 同
 酔ひ痴れて雨迷しばらくものお 同
 長松になると史呂も板につき 同
 汀柳 雨 迷

帯結ぶ端を小猫がジャレに来る
猫の目が異様に光り闇の道
前借の遊び相手に晝の猫
猫の戀五月蠅く聞いて一人ゐる
(秀)爪を磨く猫が見付けた黒い影
(軸)猫の背の丸い影あり隠居部屋
呂烈

夏羽織儀禮としては暑くるし
ぬげかゝる羽織へ氣付く懐手
太柄な羽織に男の目がそゝぎ
先代の羽織もつたいらしく出し
(佳)羽織着て虚飾に満ちた顔並べ
(同)寄り道をせずにと羽織着せ掛
(同)借り着した羽織の丈が氣に
(人)着ることも無く繪羽織も派出に
(地)羽織脱ぐ子の健康をふと叱り
(天)羽織たゝむ悲哀の中の獨者
春帆

先代の羽織もつたいらしく出し
着る事もなく繪羽織が派出になり
借り着した羽織の丈が氣に掛り
太柄な羽織へ男の目がそゝぎ
寄道をせずにと羽織着せ掛ける
(人)羽織脱ぐ子の健康をふと叱り
(地)騒ぐ氣になつて羽織が邪覽
(天)夏羽織儀禮としては暑くるし
(軸)居残りの羽織引かれる弱み持ちし
春帆

川柳 伯耆句會 (鳥取)
雑誌社
十一月末日 於美笑居 三鴨美笑報
席題 紅 業

紅葉だけ家なき庭に美しく
枕邊に枯れた紅葉も悲しかり
出動の後へ寝巻のあたたかさ
寝巻着て日曜新聞読んでいる
十二月七日 於田中屋旅舖
柳選

髪結つておかみは足袋を忘れたり
白足袋の交るネオンの忙しき
破れ足袋はいて元旦までの我慢
足袋二足買ふて歸る新世帯
先に立つ女中の足袋の黒いこと
足袋はいてはなさいいよい子です
(軸)姉妹が同じ文數の足袋をはき
兼題 赤面 美笑選

赤面して歸つてしまふ若きです
赤い顔する花嫁を下女眺め
(秀)赤面へ満座黙つて白けて
(軸)自惚れたちに赤面の大ききよ
兼題 老眼 美笑選

川柳雜誌社 畔柳社例會 (大阪)
大鐵局支部
十二月十一日 於大鐵局
兼題 指圖 山雨樓選

別荘の朝を指圖のお人柄
生あくびしてゐる指圖聞きかへし
(佳)遺言をまもつて蘭の葉が青し
(同)指圖通り動湯氣の飯へ坐し
(同)尻を上げ髭の指圖をへいと聞き
(人)おいそれと指圖に動く朝の息
(地)病人が燈明のこと指圖する
(天)仲人の指圖扇子の先ですみ
(軸)芽出度い日家令は頸で指圖も
兼題 腹腹 卷 鮎 美選

腹巻へ朝の陽があり深呼吸
腹巻のぬくみにのぞみ懸けて待ち
腹巻のどぶついたまゝ退院し
腹病質と云はれ腹巻外せぬ子
毛糸針のまゝの腹巻あてに来る
腹巻の色變へてみる子澤山
年越しの豆腹巻に温もつて
(五)我がぬくみ腹巻にある五十錢
(同)新しい腹巻腹巻を撫で、みる
(月)世話好きの腹巻からの錢の音
(同)腹巻のふくま車夫は笑つて来
(同)不安氣な客腹巻をしてるなり
(人)腹巻のゆるみ掛値も云へるも
(地)戀人の編んだ腹巻大きすぎ
(軸)腹巻に入れた財布に角があり
(軸)儲け入る朝腹巻の温くもらす
兼題 網棚 室 人選

網棚にスキーツをむだ朗らかさ
網棚に健忘性をしかられる
終點に來た網棚の辨當箱
網棚の蟹のしづくにふと氣付き
兼題 網棚 室 人選

指圖するマダム子供がほしいなり
一寸した指圖主任はほしいなり
指圖うけぬ身の氣輕さを知つた風
御指圖へなびけぬ心酔ふて棄て
光 杏林 水客 天秋

誰が吸つてるのか満員車内の煙
 満員に靴をふまれたなと思ひ
 満員の電車が無茶な急停車
 肩越しにミツキーの畫が少し見え
 満員の客へ高座の張り扇
 満員へ特別席は扇風器
 満員のまたトンネルにはいるなり
 (人)満員の晩を頭取りよく笑ひ
 (地)満員の窓をあければ月が出て
 (天)満員の電車で母のぬくたい手
 (軸)満員御禮師走の歌舞伎儲け

席題 旅 愁 某

旅に出て霞がきつい汽車の窓
 方言を笑ひ旅愁のふとまざれ
 一人旅港の街は雨になり
 むらさきの朝の旅愁の白る椿
 とつぶりと暮れ湯の町へ降りたら
 旅にれて寛の音をなつかしむ
 爪つんで旅愁はひざい蚊にさされ
 (佳)旅の空みかんの赤き買つてる
 (同)川の水枯れてる一人旅の窓
 (同)湯ざめして旅愁をり床に就き
 (同)炭鑛で九年旅愁に瘦せてゐる
 (人)茶柱へ旅のころをおちつて
 (地)ひとり旅海岸線がのびてゐる
 (天)旅に寝て時計の音も餘所のも
 (軸)旅愁の灯土地の女と目が出合ふ

妹の方へ父親頼りきり
 嫁入りの寫眞妹が出してくる
 喜山人
 光選
 席題 妹 一

姉妹異性の噂にちよつと觸れ
 愛人があり姉妹のかくすもの
 煙草屋の店姉妹が並んで居
 性格の違ふ姉妹へ父と母
 姉妹の夫こつそりうまが合ひ
 乳房ふくませてゐて妹とは見え
 妹がさきに嫁いで師走來る
 紡織の流行で姉妹秋祭り
 この頃の心を妹にみられまい
 姉妹の無心に母はあきれはて

席題 鶴 楚

何時見ても鶴は立つるばかり
 鶴が来て今年も豊作つらくなり
 千羽鶴ごとと動いて酒宴果て
 庭園の廣さに鶴は愈屈し
 鶴が来る頃借金期限なり
 (佳)千年の命へ鶴は餌をせり
 (同)鶴の影動かすお城壁をて
 (同)鶴折つて女學生落付かす

愛人の無口へベンチの夜が更け
 欺す氣の無口な男の目に恐れ
 嘲笑に無口今日は負けてゐず
 無口だが心許した友だつた
 狂人の無口無氣味な目上げる
 離れゆく心無口な日がつき
 さびしき朝を無口な夫含嗽する

無口者の恐怖相手を無口にし
 たよりなき無口と呑めば酔ふば
 あれからは断然無口者となり
 無口の父に飯をすゝめる
 (人)言ふこともあれ無口は嘗を取
 (地)無口のさみしき日記に綴る僕
 (天)嘲笑に無口の父がうらめしく

解いて見る微妙な手をはなし
 らいらいてテテリケートな戀を知り
 テリケートな動きも見ず昨日今日
 テリケートな神経が女をかばつた
 狂戀の一步手前のテリケート
 (人)テリケートな噂を辻の風
 (地)ひびき居ればひびきは淋し夜の呼吸
 (天)三角な戀テリケートな事ばかり

大川 華村 田鶴緒 植夫 沈丁花 草路 光選 琴月 碧朗 一歩 大朗 虹路 月步 緑之助 田鶴緒 好郎 健芳 草路 一歩 好郎 緑之助 同 夫選 光

六圓の寄附は活字が小さいなり

一圓を借りるに印の證書のと

日給一圓—愛の菓のさ、やかに

かき、りの金壹圓也の青春よ

一圓の昇給を母は喜んでくれま

一圓札折目さちんとた、んでみ

一圓を返し、獸心を驕る

(人)情死體の一圓何んは持つて

(地)一圓を拾つた夜が明い

(天)一圓のしわを延ばして淋し

米屑は團子となつて生きました

(人)紙屑をまるめて、泣ける宵

(地)屠ちも吾等が爲の土よ陽よ

(天)打ち明ける氣で糸屑を丸め

同 白足袋

白足袋に踏まれ喧嘩にもならず

白足袋で来てじろ、見直され

紐落しもう汚れてゐる白い足袋

玉の輿その白足袋を汚すまい

霽踏んで心の白足袋祈願する

川柳雜誌社 大地新春句會 (鳥根)

支部 於尼 綠之助居

兼題 純情 綠之助選

純情はその筆先にもある文字 一步

純情の妹思ふ雪の降る 火川

純情はいつしが涙となつてゐる 糸風

純情を守り強く生きてゐる 松濤

妻の純情が更生させたんだ 沈丁花

言ふことを信する妻に勝てぬなり 夢人

純情な娘で通り二十八

(人)うぶなむすめのあた、耳

(地)言ひ切つたその唇の純情さ

(天)純情を殺す金とは知らなんだ

同 日記

嬉しさも禁酒誓つてある日記帳

二三度も禁酒誓つてある日記

妻の日記にかゝる嫉妬を感じたり

單調な生活に、く日記帳

嫁ぐ夜をさびしく日記を焼いた姉

(人)日記が思ひ出させる瞳です

(地)日記を賑はしただけの戀で

(天)青春を捨て戀を捨て日記帳

席題 正月と女 華

どの姉も似合つた髪のお正月

(人)門松をくぐる女の襪さばき

(地)こつぱりと炬燵で母の寢正月

(天)この街の果に眉を描く松の内

同 豪華 華 羅

人豪華版となりしエロとグロ

(地)豪華な氣性一代切りだつた

(天)財力を誇る舞宴の華を極め

同 青春の一頁豪華なる記憶

軸 青春の

樽に釘その人生が面白し

釘買ひに出る用があり日曜日

古釘を叩き直せる指の鐵

一人居の着物釘の錆つけてゐる

(人)引越した愛の菓釘が光つてる

(地)大、中、小釘散らばる大工小屋

川柳雜誌社 部 今治句會 支 席題 小包 心 府選 曉童 小包は下宿の印で事が足り 小包へ母巻紙で書いて来り 小包でどうにか旅の義務がすみ (佳)小包へ母の個性が懐しい (同)小包にはるか故郷の夢を盛り (同)小包が嬉しい朝にしてくれる (軸)小包の結び目にある懐しさ 席題 第三者 小 樓選 心 府 第三者損のゆかない口をき、 それからを静視してゐる第三者 第三者黙つて耳を揃へてゐる 肩入れを第三者から笑はれる 憤慨をしてやるだけが第三者 (佳)話だけきいて歸つた第三者 (軸)第三者煙管の音をさせてゐる 兼題 露路 宵 明選 小 樓 大望を持つた男が露路に住み ともか、露路の話題はハイヒール 露路の雨蛇の目を斜にきして出る 暮の露路救世音がやつて来る 此の露路に一番古いチンドンヤ この露路へ自動車から来女給が 白足袋はつかれて露路を戻つて来 その昔噂の女露路に住み おしめ一列露路の陽あたり 獨り者露路の暗さになれてゐる (佳)一年を露路で暮した共稼ぎ (同)佩銀は露路で大きく一つなり 曉童

(同)十二月子まで錢のことを聞く 松雨

席題 ホテル 流之介選

ホテル出る女へ淫らな瞳を向ける 青鬼

警宮の包圍の中にホテル更け 浮鬼

残されてホテルの寒い窓をしめ のぼる

(佳)山村のホテルの中の灯も眞赤 まさる

席題 入營、退營 互選

退營に伍長勤務の肩の幅 浮鬼

退營を迎へる中にある甲種 青鬼

三ツ星で除隊はしたが職がなく まさる

入營の汽車走つてゐる國境よ 緋紅

入營の丸刈となるお正月 青鬼

川柳 光笑會句會

雜誌社 十一月二六日於カナメ喫茶店 永田里十九報

兼題 足温め 艸樂選

果太鼓今日も聞いてる足温め 龍三

山長を思ひ出させる足温め かほる

お馴染に慌てた下駄の足温め 禿山

新しい足袋を氣にして足温め 里十九

夜の部に晝のまんまの足温め 同

(佳)足温め男の足がさわるなり 豆秋

(同)足温め冷めて寝未だ合はず 同

(同)足温め豆炭ヒンで起して 龍三

(軸)足温め一人だけお茶は引かす 艸樂

兼題 吹雪 豆秋選

吹雪吹雪きりきり飛んで夜の辻 龍三

美しき夜の吹雪よ戎橋 禿山

ロケーション吹雪の間休みなり 里十九

氣の弱い男吹雪へ酒を呑み かほる

學校へ出して吹雪へしばし立ち 艸樂

席題 白足袋 清記互選

白足袋の男つかつか茶屋の晝 禿山

白足袋につく支那の砂ほこり かほる

白足袋がスラリと立つ三味鳴り 同

白足袋で飛田へ廻る出来心 艸樂

白足袋で綿入を着ぬ男なり 同

白足袋へ處女と別れる夜であり 龍三

白足袋が走ると南地の俄雨 同

白足袋を履くと葬式かと思はれ 十九

白足袋できて伯父様をあざむかん 同

席題 仲仕 清記互選

仲仕一人優れたい、男 里十九

ウキンチへ仲仕素早い腕を見せ 同

ごろ寝した仲仕へ暗い塙末の灯 龍三

ごぶ酒で酔ふた仲仕へ時雨する 同

歩み板仲仕よいしよと腰を入れ 艸樂

判取の判へ仲仕が息をかけ 同

トラツクの仲仕がお辭儀して走り 同

仲仕から仲仕へ舟の底が見え 同

おなごしなからかふ仲仕肥えて 同

席題 焼鳥 互選

道々の焼鳥を見て厄詣り 艸樂

焼鳥のあわれ小さいあたまかな 禿山

焼鳥のけむりを街へあふぎ出し 豆秋

焼鳥は風に背中を向けて食ひ 同

席題 湯豆腐 互選

湯豆腐をはさんで愚痴を聞いて 龍三

湯豆腐の隣り座敷は空いてゐる かほる

湯豆腐が動いて仲のいゝ夫婦 豆秋

湯豆腐へ眼鏡はづした顔になり 艸樂

湯豆腐へこの仔猫はよく馴れて 艸樂

湯豆腐の抽子の匂ひに箸を取り 里十九

二次會はまた湯豆腐がついてあり 同

光笑會 聯合句會

梅田支部 十二月十五日 於カナメ喫茶店

兼題 十二月 艸樂選

餅花は忙しい中の十二月 禿山

床の間の番がきたい十二月 夕鐘

十二月やつぱり呑んで歸りませう かほる

十二月みんなこつちへ向いて来る 豆秋

頼母子が流れこんでく十二月 方眠

鉢巻をうつかりしてた十二月 里十九

十二月すまぬ乍ら遊んで居 觀月

盗まれた着物が戻る十二月 同

驚のすり餌に餘念なき師走 同

(軸)十二月出来る夜店も辛抱し 艸樂

兼題 砂 鮎美選

砂白く白く海岸線はのび 静波

首だけを砂から出してお父さん 親月

守唄の置場は暖かき 方眠

寝過ぎた節穴の陽の金砂子 禿山

砂に座し戀を語れば砂を蒔き 艸樂

三人の子持へ砂で遊ばれる かほる

手から手へ砂を落して獨り子の 豆秋

(軸)月の濱砂にこるべば詩となり 鮎美

兼題 湯上り かほる選

湯上りの禪一ツ腹を立て 禿山

湯上りへおちつきのある下駄の音 夕鐘

玉子酒呑んで湯上り早く寝る 方眠

湯上りを急いで来たはひやかされ 艸樂

湯上りの眞赤になつて十六貫
湯上りの父へ一本つけて待ち
湯上りへコップの水の美しき
湯上りのマダムに好きな花が咲き
湯上りの日向がまぶし柿を買ひ

樂屋落ち

坊茄子
静波
観月
鮎美

里十九さん披講のなかげ用が出來
降りさうな空へ氣の浮く艸樂氏
あいきように豆秋君はちと吃り
豆秋のめがねに御酒がおちつきぬ
夕ぐれを舞してほしいかほるさん
夕鐘の頭越しなり立見席
洋服で來た夕鐘のませている
親分と云へば里十九氏そり返り
坊茄子氏ダンサーからの手紙を見
鮎美さんの聲がきこえた甲子園
禿山氏酔ふた〜とやつて來る
かほるさんおかるの役にあてはま
り
ネ々薄い藝妓は逃る艸樂氏
蝶六の形も出來ます里十九さん
踊らしてもらひまつきとかほるさん
新妻の三味に夕鐘浮かれ出し
禿山は五合でたらぬ顔である
襟ふかく坊茄子ホールから消える
禿山の膝の短い座りやう

ひかり集(その十八)

夢ははるか

ト居

ひとり旅夢みる人にもを言ふ
夢ははるか君のこゝろにあきれぬ
夢ははるかに妓の唇紅はあせぬ
夢ははるかに現實の佛達

十一月十八日

S O S 夕 鐘報
暁を飛ぶ飛行機へS O S
S O S 神に祈りつゝ生きる
S O S 處女は嵐をつゝ走り
S O S 浪の間に間に見えかくれ
運命はロビンソンに似るちぎれ雲
流れ星おんなの金切聲になり

つどひ (大阪)
第廿三回 姫田夕鐘報

舌
新婚の今年雑煮の舌さわり
舌打ちする〜苦情出る時分
舌打ちはずれごと且那のよい氣嫌
舌出してあられやこんこ受ける兒等
舌さはり冬の味覺のちりの鏡

耕一路小集 耕一路報
入 營 五 選

さらば父母營門をくゞる僕
入營に靴十一文が五六人
入營に母は少さく後に居る
入營は男を飾る第一ツ
入營の門をくゞれば違ふ風

大樓 松葉 五健 耕一路 大樓

看板 出来開店の曆くり
看板屋立ちん棒の眼を背に感じ
電氣屋と意見が違ふ看板屋
看板の眞面目き二代續く店
看板の出來を見上げる看板屋
看板にされた冷めたい娘となりぬ
看板の名炎露路の奥の奥
女が二人ある風景
閑なバー二人からんである女給
失戀と得戀きれいなが二人
陳列へ女二人の肩を寄せ
乗降場譲り譲られてる女

名刺
にぎやか藝者の名刺貫はれる
記者と云ふ名刺が今日は來る日
たもとから女房見つけた花名刺
留守番へ頼む名刺は裏へ書き

梅
牛小屋の香漂ふ梅の村
咲き盛る梅へ衛兵背なを向け
着ぶくれた人ばかりある梅林
春陽の先驅者と云ふ梅の花
別荘の空家淋しく梅は咲き

忘年句會 (愛媛)
十二月十八日 稲田草樓報
兼題 除 隊 新海素泉選

大樓 耕一路 大樓 五健 耕一路 大樓 五健 耕一路 大樓

編輯の窓

山 雨 樓

を感謝しわざと割愛しておく。

▼本號は意外の延刊となつた。

主幹の病氣と編輯に携はつてゐるわれ／＼が、旅行其他の止むなき用務の爲め事を欠いたのである。雜誌を待つてゐ下さる讀者諸兄に對し恐縮に堪えない。

▼路郎主幹は病氣引籠の處を押して執筆された。巻頭言がそれである。充分味讀して頂きたい。▼愈々本號から日本名所名物川柳東京の巻を連載することになつた。關東川柳家の壓倒的投吟を祈る。

▼本誌新年特輯號は大變好評であつた。反響の文章手紙も尠くないが、その好意

▼月評は一月十八日、事務所で開いた。汀柳氏止むを得ぬ用事で参加が出来なかつたので紳樂氏と僕二人で夜を更かした。

▼陶泓居松竹梅のつごひ、は亂耽記の通り、大變なごやかな風流たつぶりなものであつたが、僕は年末からの風邪で缺席——

正に千歳一週の間を逸した。

▼川柳家戸籍調は一回休載。

▼「雜筆春秋」欄にユニークなコメントや短文を期待する。以前ピルゲンク欄で好評だつた、素人亂耽、かほる氏等の疊を摩する好作家が、ま處らに隠れてゐる氣がしてならない。

▼終兩兄表彰祝賀の夕は近來に珍らしい愉快な催しであつた。カナメではその晩の商賣を休んで總動員してくれるし、美しい彼女たちも酒間の輪旋と伴奏にとめてくれたので皆のはつしやぐこと。殊に隠し藝の面白さ

に至つては主幹を初め東魚、雨

迷氏等を狂喜せしめ、就中柳次君のうまさには一同舌を卷いた

▼路郎主幹は月末から微恙と疲れが出て引籠つてゐられる。「心配はいらぬ」と云つてゐられるが恢復をお祈りする。

▼おもちゃの繪と句と玩具の會が一月二十一日から二十六日迄大阪朝日ビル二階専門大店別室で開かれた。おもちゃの繪に川柳の贊を入れ表装されたもので、仲々好評であつた。

玩具の繪は阪本春葉、福田芳穂、楠晴崖、前川悦三、金澤晋村部としの諸氏、贊の方は路郎先生、森東魚、山本雨迷、増位汀柳、西田紳樂の諸氏及僕とであつた。玩具は村部氏の出品

▼一月の二十日會（於キンケ喫茶店）は高野山の葉魚、京都の司郎の兩君、神戸の歌人竹中洋

氏（氏は川柳愛好者）を始めとし、機見女、新水、鮎美、夕鐘、里十九、汀柳、史呂君等變つた顔振れて、仲々盛會であつた。路郎先生を中心にスキートの話、句の話、芝居の話など随分はずんだが、餘り賑やか過ぎて記事を書く人が忘れてしまつた始末。

▼尾上夜半杖君（函館）が舊臘二十八日亡くなられた。「永らく病床に親しんでゐたが遂に立つことが出来なかつたが、名句川柳其他で仲々川柳に盡した男だつた」と路郎先生は一二回面接もあり痛く惜しがつてゐられた



（故夜半杖君）

投稿規定

- ▼ 投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼ 「近作柳摺」は全作家の雜吟を募る
- ▼ 「川柳塔」への投句は同人に限る。
- ▼ 各地會報は牛紙判原稿紙に清記の事
- ▼ 文章は二十字詰原稿紙使用の事。
- ▼ 書體はなるべく楷書川柳雜誌原稿紙と封筒に朱記の事
- ▼ 締切は嚴守されたし。
- ▼ 投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第十二卷第四號課題

二月五日締切

(各題十句以内)

藝妓 増位 汀 柳選

草 山本 丹路 共選
東谷 開路 共選

第十二卷第五號課題

三月五日締切

(各題十句以内)

手拭 橋本 綠 雨選

髮 西村 明 珠選
明石 柳 次選

每 號 募 集

近作柳摺(十句) 麻生 路 郎選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切は事務所宛

定 價

一 部 金 參 拾 錢
 半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼ 御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼ 誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼ 送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼ 御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼ 御注文には何月號よりと御指示願ひます▼ 轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼ 川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十年 一月廿五日印刷

昭和十年 二月 一日發行

第十二卷 第二號 (毎月一回一日發行)

禁 無 斷 轉 載

編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎
 發行 所 大 阪 市 西 成 區 玉 出 本 通 三 丁 目 三 六 番 地
 大 阪 市 西 成 區 玉 出 本 通 三 丁 目 三 六 番 地
 電 話 天 下 茶 屋 二 五 七 九 番
 電 話 南 六 四 四 番
 振 替 大 阪 七 五 〇 五 〇 番

川 柳 雜 誌 社

事務所 大阪市天王寺區上沙町一丁目五一番地

賣 捌 店 書

(大阪) 大賣捌二盛社書店 | 明文堂 其他 市内 各書店 |
 (東京) かん 東京堂 かん 巖松堂 かん 吉岡書店 かん 玉森堂 かん 紀
 伊國屋 かん 三味堂 (神戸) 米田、寶文館(函館) 石塚 (京
 都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂

川柳雜誌案内

六續活字四角三行金五十銭、一冊出すに
 送料(郵費)但し前金(手摺可)その他
 改題(標紙)句會案内(柳書)等持、その他

並製合本特賣

「川柳雜誌」の合本第二卷
 より十卷まで

各壹卷 金壹圓五十銭

大阪 市内送料 壹冊 六銭
 市外送料 壹冊 廿四銭

大阪市住吉區平野西之町八三

川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「評判」 路郎 選
 二月十日締切

その他雜吟を募る

▼用紙 官製ハガキ(化粧柳
 壇と明記の事)

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す

▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六
 麻生路郎氏宛

化粧新聞社



菊判每號七十數頁

毎月一日發行 一部廿五錢

東京豊島區高田本町二の一
 四六八 川柳まより社

(取次所) 川柳雜誌社事務所

蒐集

▼新聞、雜誌(川柳の雜
 誌以外)に

掲載ある川柳に關する記
 事の「切抜」

▼川柳家の集合寫眞、個人
 寫眞

▼川柳の短冊、色紙

右の品雜誌の編輯上必要に付
 御贈與下さい。

大阪市住吉區平野西之町八三

橋本 綠 雨

朝報柳壇

雜詠募集 汀柳選

用紙ハガキ、句數無制限

大阪市西區四ツ橋南

大阪 朝報社

増位 汀柳宛

毎日川柳の事を掲せてある
 大阪朝報をお讀み下さい。

社告

本社の例會案内希望の方は左
 記へお知らせをお願いします

東區道修町五ノ三四

會報係 毛利 九波

電報本局一五六四番

お願ひ

御承知の通り東北地方は天明以來の大凶作にて、殆んど餓死
 線上にさまよふ有様で御座いました、各新聞社が「絶望の東
 北を救へ」との輿論を喚起して下さつた爲め、同胞愛のお恵み
 を賜り一同只々感涙に咽んで居ります。然し乍ら限りなき窮民
 の救済に當るには未だ、至難の業で御座います。
 満天下の柳人諸兄弟、希くは私共の苦衷御憐愍の上、更に御
 同情を賜り瀕死の一同をお救ひ下さる様何卒々々切にお願申上
 ます。

※ 捐下さるものは金員、食糧品、防寒衣其他直接生活に必要
 な品々を特に喜びます、配給は柳人及縁故者を目標とし勝手乍
 ら當吟社にお任せ下さい、義捐金品拜受の上は當吟社より直に
 禮状を差出す外、東北川柳誌上にも發表して深謝いたします。

山形縣東置賜郡伊佐澤村 この花吟社 代表 布施蓮台

光耀句會二月例會

場所 キング喫茶室 南海線玉出驛下車
 本通十五間道路路北ノ辻西入

時日 第二日曜(二月十七日午後二時)

會費 參拾錢

兼題 「山」「競馬」各題十句以内

光耀會が復活いたしました。婦人の方々は萬障繰合せて御出
 席下さい。遠方の方々は兼題の投句を必ず御記憶れがひます
 投句家々び出席者は婦人に限りますが、本社選者の方々でお
 暇のあるお方は御出席下さいまして御援助れがひます。葎乃

主催 川柳光耀會

幹事 竹内機 見女

(順はろい)

川柳雜誌社關係人の々々

贊助員

末弘殿太郎

食満南

吉田水車

喜多春

春元紀

池澤樂居

伊藤彦造

柴谷春雨

立井美坊

宮岡白峰

高橋かほ

長谷川徹

鳥山一歩

藤里好古

中西おさむ

水谷美咲

永田里九

岡本弘雄

大島濤明

小森不浪

中澤濁水

芝田四葉

山本丹路

片岡直平

大谷五三郎

藤里好古

中澤濁水

清水帆葉

阿部閑生

笠原純生

大西長三郎

森東魚

中澤濁水

平井蒼帆

阿部閑生

田中純二

岡井辰秀

岩崎柳路

熊谷紅

平井春光

阿部閑生

嘉納純二

岡井辰秀

岩崎柳路

熊谷紅

平井春光

阿部閑生

長崎柳秀

川上三太郎

石曾民

松下鶴

平井春光

阿部閑生

長岡半太郎

川上三太郎

石曾民

松下鶴

平井春光

阿部閑生

長野晴濱

米村あ人

長谷川三郎

近藤新水

東谷華夕

西田雨

國枝史郎

田村孝之介

西村山

阿形一

東谷華夕

西田雨

藤村史郎

田村孝之介

西村山

阿形一

東谷華夕

西田雨

藤本卯之助

谷脇素文

大野八喜

青木史

毛田波

福田雨

赤井清藏

安川銀波

大野八喜

青木史

毛田波

福田雨

淺田清一

前田五郎

岡田遊

北山悟郎

生田翠

生田翠

道頓堀支部

大阪府 幹事 庄

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

九三會支部

大阪府 幹事 北山

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

神戸支部

神戸市 幹事 首藤

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

函館支部

函館市 幹事 龜井

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

高知支部

高知市 幹事 國澤

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

梅田支部

大阪府 幹事 清水

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

釜ヶ池支部

大阪府 幹事 浮美

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

田邊支部

和歌山 幹事 左馬

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

箕川支部

島根縣 幹事 尼

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

京都支部

京都市 幹事 中平

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

鳥取支部

鳥取市 幹事 島

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

堺支部

堺市 幹事 八木

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

光吉支部

大阪府 幹事 野

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

光吉支部

大阪府 幹事 野

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

光吉支部

大阪府 幹事 野

松山支部

石丸 晴朗

北濱支部

大阪府 幹事 谷村

大正 十三年三月三日第三種郵便認可(毎月一回一日発行)
 十一年一月廿五日自發行 昭和十一年二月一日發行

川柳雜誌 (第一三三號)

定價金三十拾錢 送料壹錢

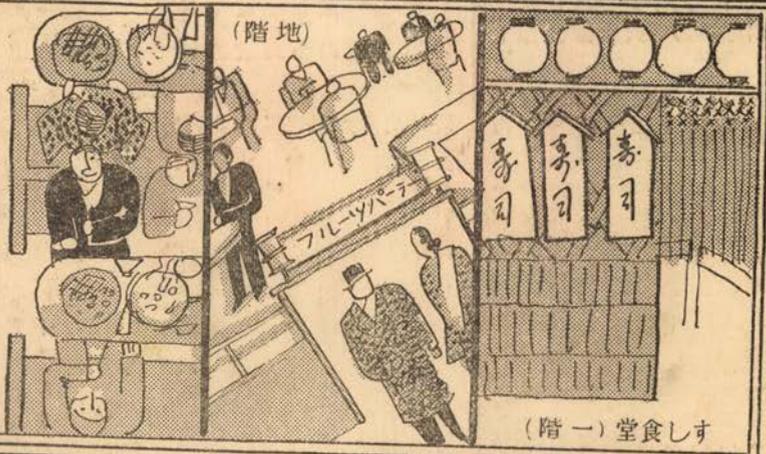
高海南島屋食堂御案内



サロン
(七階)



すぎ焼ホール(地階)



(階一) 堂食しす

ムールチンラ
(階地)

